

平成22年度
修士論文

三重県の漁業集落における路地空間の視覚的展開に関する研究

可視限界による領域感の形成と視点移動にともなうその遷移の観察を軸として

指導教員 富岡義人 教授

三重大学大学院工学研究科
建築学専攻
野並和紗

A Study on the Visual Transition in Alleys in Fishing Villages, Mie Prefecture, Japan

Through the Observation of Semi-Closed Spaces Established by the Changing Visual Limits

NONAMI, Kazusa

1 章 序論	PP.1-10
1.1 目的	
1.2 背景	
1.3 既往研究	
ゴードン・カレン 都市の景観 1971	
1.4 研究方法	
1.4.1 研究の流れ	
1.4.2 用語の説明	
1.4.3 研究対象	
1.4.4 対象集落の分析	
2 章 可視距離の分析	pp.11-43
2.1 可視距離の測定	
2.1.1 答志	
2.1.2 阿曾浦	
2.1.3 古和浦	
2.1.4 島勝浦	
2.1.5 九鬼	
2.2 可視距離の変化と焦点	
2.2.1 焦点となる建物の用途	
2.2.2 可視距離の比較	
2.2.3 可視距離の変化	
2.3 まとめ	
3 章 可視範囲内の分析	pp.44-60
3.1 路地と幅員	
3.2 窓と庇	
3.3 塀	
3.4 空	
3.5 基壇	
3.6 まとめ	
4 章 結論	pp.61-62
4.1 結論	
4.2 今後の展望	

付録

答志

阿曾浦

古和浦

島勝浦

九鬼

参考文献

1 章 序論

1.1 目的

1.2 背景

1.3 既往研究

1.4 研究方法

1.4.1 研究の流れ

1.4.2 用語の説明

1.4.3 研究対象

1.4.4 対象集落の分析

1 章 序論

1.1 目的

- ・ 可視範囲の制限と変化から漁業集落の路地における領域感の把握
- ・ 視点移動から生まれる空間要素の遷移の観察

1.2 背景

漁業集落は一見すれば、雑然とした高密度な集落に見える。しかし、漁業集落は不思議な魅力があり、これまでも数多くの研究がなされてきた。

例えば、雑然とした中にたくさんの要素が含まれていることや、住宅の平面構成や路地の使われ方などである。これらは漁業集落の空間構成を把握するため、高密度集住を実現するための方法を探り多くの蓄積が行われてきた。

しかし、漁業集落の「景観」を考えると宿場や城下町とは違い対象にされる機会が少ないと見受けられた。また、自然災害や法的な問題から容易に漁業集落の形は失われてしまうことがわかる。例えば、福岡県の玄界島があげられる。(注1) この漁業集落では復興の際、同時に法律や生活環境の改善から集落の形を大きく変えることで、これまで抱えていた問題点も解決しようと試みた。その他にも地震による被害からの復興等による漁業集落の更新の例は幾つかある。また、三重県志摩市の波切漁港のように立地条件や周辺環境の条件から少しずつ漁業集落の形を維持できなくなっている地域もある。

そのため、ここで漁業集落について調査、観察する事は現状を把握する資料的価値があると言える。又、その構成を知ることは集合住宅などの計画において活用可能な方法を示す事となる。さらに、路地の景観を考える事は漁業集落の魅力の発見となる。そのため、今回は漁業集落で最も特徴ある路地空間の視覚的展開を可視範囲の変化と変化による建築要素の遷移を観察する事で明らかにしようと試みた。

注1
福岡西方沖地震 (H17年)
により大規模な被害を受け、
集落全体を対象に復興事業
が実施された。

1.3 既往研究

ゴードン・カレン 都市の景観 1971

これまで都市をシークエンス的に捉えた文献は幾つかある。中でもタウンスケープを概念とした文献が幾つかあり事例を取り上げ調査されている。

この本（注2）では都市を様々な要素の連続と展開として捉える方法について考察されている。

注2

Gordon Cullen: 都市の景観
鹿島出版会 1975 原著
1971

都市の色々なシーン、装飾、建物の配置、デザインなどを多種多様な項目を取り上げ、要素を抽出し実際に調査している。この文献の中では際立って特徴ある要素が注目されるだけでなく植栽や建物の色、素材など建物により多様な物も要素として取り上げている。しかし、項目（表1.1）が雑多であること、また要素の中には小規模な集落には当てはまりにくい物があり有効性に欠ける点が幾つかある。しかし、都市の地域性や路地空間でのシークエンス的な捉え方は実際に都市を歩くときの感覚を示そうとしている。漁業集落のように路地に特徴ある場所ではこのような観察方法が最も適していると考えられる。

表 1. 1 ゴードン・カレン 都市の景観の項目

番号	項目	内容	番号	項目	内容	番号	項目	内容	番号	項目	内容	番号	項目	内容
	場所		20	照準	指し示す。注意を高い場所へ引きつける	40	無限	空を背景として使う、無限遠の先の空の線に使う	59	郷愁	静物面の賑やかな風景	78	筆跡	白い壁に文字を書くように手すりやベンチの端の形は目を引く
1	領有	屋外の場所の一部を性格付けして使用する	21	切断	前景と遠景を切り離す要素を置く	41	神秘	見えない「あそこ」は好奇心をかき立てる	60	白い孔産	むこうの世界は必ずかに見えろが人か絵の無い前庭がある風景	79	広告	広告は集まると活気を生む (建物はその枠組みを用意する)
2	占領による領有	木陰や軒下のような、利用目的を生み出さうなもの	22	高低の変化	親密感や包囲感等の感覚をレベル差で生む	42	深淵	先きの見えない入り口やアーチは未知	61	露出	空庭、大空の広がり、幾何学は外界に身をさらしている露出感をうむ	80	飼育	作法に使い自然に入り込む
3	移動による領有	参道など明確な性格を移動によりもたらされた場所	23	捕獲	前景から風景に網をかけ遠景を近づける	43	都市の床	路面は単調な都市に統一を与える	62	親密感	柔らかい色調、着った建物などに暖かみを感じさせる要素 (活気)			
4	優越	優越線 (顔の横干のような人が足を止める場所)	24	影絵	建物の影、空の領有	44	歩行者の道	ネットワークとパターンを作る、都市を結びつけ生き生きさせる	63	錯覚	「これ」と「あれ」の対置①「これ」を「あれ」の景に見せかける	81	建造物	危険を知らせる
5	粘性	静的領有と移動領有の間に起こる人の軌と軌の動作が行われる場所	25	壮大な通景	ピスタ、前景から遠くの風景に結びつける	45	連続性	二つの場所を直接結びつける方法	64	隠蔽	②「これ」を「あれ」だと暗示をかける (隠蔽の効果)	82	冊	
6	飛び地	屋外に何かい間かれた屋内のこと、街の外と動の動作が行われる場所	26	空間の分割	人の視線の分潤、こことあそこの効果を作り出す	46	障害地帯	視覚的：接近を可能 / 物理的：拒絶する方法 (人、家畜の動きをコントロールするとき水、補道みで行く)	65	証拠	何かを想起させる形、状況	83	垣根	公と私を分ける
7	囲い地	人と車を結ぶ場所 (車 = 通過車と人 = 停車 / 囲い地：人間のスケール維持)	27	仕切られた通景	水や見通しの利く素材でこちら側の感覚が強化される要素				66	精霊崇拜	③何かに似ている形、何かを連想させる形 (顔の線に見えろのドア)	84	階段	安全な場所やその先の場所を示す
8	焦点	中空の囲い地と対をなす (特別な場所にするための要素)	28	魅力的な身振り	単調な街路や地味な環境に色をつける要素	47	分類	細分された環境のそれぞれの部分が持っている固有の特徴を示す	67	顕著な不在	省火栓や生き生きとした色彩等注意を引く	85	黒と白	活発さ快活さ安全性の表現
9	境内	都市の境界 (外は交通、内は密度高い歩行者の場所)	29	閉じた通景	ピスタ延長上に遮断物を作る (ピスタ：主部と遠部を持つセンチンス)	48	分類された景観	異なる二つの内容を明確に對比して置くか木立などでうつろに示す	68	暗示的な事物	消火栓や生き生きとした色彩等注意を引く	86	感触	テクスチャーの変化
10	屋内の風景と屋外の風景	屋内の風景は手がかりに屋外の風景は作られている	30	偏向	ピスタの延長上に建物を少しずらしで建てる	49	並置	異なる二つの内容を明確に對比して置くか木立などでうつろに示す	69	彫刻としての建物	建築物が風景に溶け込まず象徴、彫刻的なものになるもの	87	文字	個性を示す装飾 (上手に使えば)
11	屋外の部屋と囲い地	ごちら / あちらの区別を付ける方法 (屋外の部屋の一部分が囲い地)	31	突出と後退	曲がりくねった街路が建物の突出と後退を生み落し着きを与える	50	直観性	手すりや注意書きが無くても危険や様々な情報を感じ取れる状況	70	幾何学	直線や曲線のように幾何学が風景に入ることでも質的な物に変化する	88	装飾	目的をはっきりし
12	複合囲い地	囲い方のバリエーション	32	挿話	塔や鐘、色鮮明な目を引く特徴ある要素	51	個別性	ある物が「そのもの」であること	71	複合的な利用	「これ」と「あれ」の共存	89	道路	街頭や標識
13	閉塞家屋	流れを停滞させる要素	33	句読点	街路の中のとまりを示す (場所ごとに機能とパターンが変化していく)	52	詳細な観察	細部に注意を注ぐ (見えている風景が次第に生氣に満ちてくる)	72	対照の妙	「これ」と「あれ」の調和			
14	実体のない空間	囲い地を不明確に区分する物 (鏡 / スクリーン / 香り) で場所をしめす	34	挟路	囲いにコントラストを生み出さうな感覚と歩行者に鮮明な緊迫感を生む	53	隠れた街	町や村で見かけられる様々な特質 (雑踏の真の静かな街)	73	関係	色々な構造物の反復 / 思いがけない構成 (外階段 / 逆風 / とびばり)			
15	空間の画定	天幕やロープ、竹などささやかな手段で囲い地を作り出す	35	乱調	空間の性質が次から次へと変化していく魅力を持つているか	54	都市性	都市生活の特性と特質が要約されている	74	規模	対比的な両者が並ぶ事でより強調される			
16	囲い地からの望見	手が届かないが常に存在することが生まれる、あちら側を見る	36	波動	街の道の蛇行は一つの場面に含まれる可能性の範囲が示唆	55	複雑性	平明さと衝突するが人々の目を引きつけるもの	75	地図上の風景	都市は大草原の風景の計画ではなく線が目線を持ち計画すべし			
17	あちら側	手が届かないが常に存在することが意識される場所	37	閉止	連続感を残し視線を遮る、吊るし看板や連続する建物の同じ躯体	56	妥当性	主張し相互尊重の意識も持ちふさふさしい物でないが問題の無い物	76	歪曲	あるもののスケールを極端に大きくしたり、極端に小さくしたりする			
18	こことあそこ	「ここ」と「あそこ」の性格の違いがあることを示す	38	後退	建物のスケールの操作により空間を拡大したり縮小したりする	57	無伴さと力強さ	明らかに場を占しているもある種の存在感を持つもの	77	織り込まれた樹木	木は囲い / 建物の引立て役、彫刻のようにもなる (タウンスケープの自然の要素)			
19	囲い地からの望見	あちら側からこちら側を見る	39	期待	「ここ」と「あそこ」で未知のあそこを繋ぐ方法	58	錯綜	平凡な街に現れた複雑に絡み合い視覚は吸い寄せると不思議な物体						

1.4 研究方法

1.4.1 研究の流れ

本研究は次の3段階から成り立つ。

1：路地空間の捉え方の設定（1.4.2用語の説明）

2：対象漁業集落の分析-路地の可視距離（2章）

3：可視範囲内での領域感を強化する要素の分析（3章）

以上の流れで本研究を行う。研究方法は1.5.2以降の通りである。

1.4.2 用語の説明

本研究では路地空間の視覚的展開を調査するが、シークエンスという言葉では多少、多義的である。そのため、もう少し限定した可視範囲という言葉を用いる。同一形状が連続するのではなく、漁業集落の路地では多様な要素が変化する事で構成されているといえるため、それを示す用語として可視範囲を設定した。(図1.1)

「可視範囲」とは路地を奥行きと上下、左右方向で視界に入る範囲を表す。

見通しのきく最大距離とその空間の画面となる両側の家によって構成される。

映像の一コマのようなものである。

可視範囲は任意の地点での視界を示しており、人が路地を移動する際、実際に目に触れる物の範囲で、これが連続し視覚的展開が生み出されている。本研究では特に可視距離はもちろん、空間を画定させる建物の要素にも注目しその展開の特徴を示そうとした。

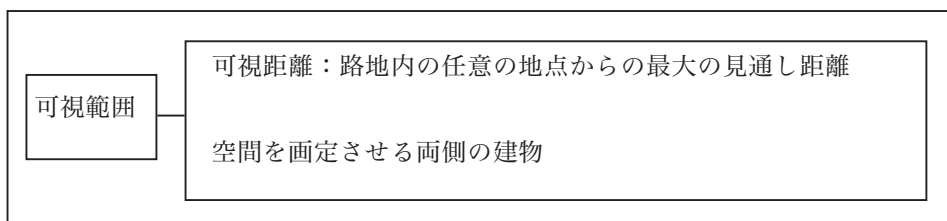


図1.1 可視範囲とは

1.4.3 研究対象

卒業論文

卒業論文（注3）では各漁業集落の空間構成に注目して、漁業集落の共通する構成（空間図式）の一端を把握した。

研究の背景として以下の事があげられる。

漁業集落の中を歩いてみると、その地形や方位は様々であり、建物も一見無秩序に密集しているように見えるが、一度、集落を訪れれば、次に他の集落に訪れても道に迷ったり、位置認識を失うことはあまりないと思われる。これは、集落の中に上述のような形状的な違いを超えた共通の空間的秩序が存在しているのではないかと考えられたからだ。

また、既往研究の整理から以下の事が言えた。（図1.2）

空間構成をより共通項のみ取り上げ一般化したものが空間図式である。

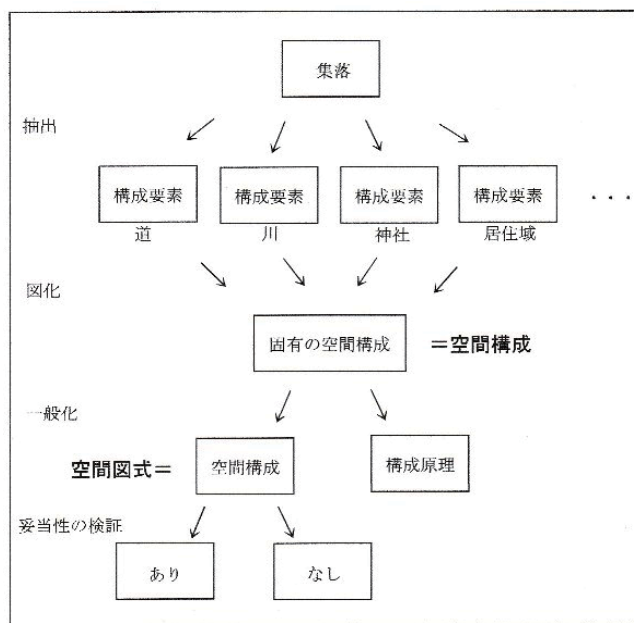


図1.2 集落分析の段階

卒業論文では共通のエレメント＝「海」、「私設（寺、神社）」、「海岸線」、「主要な道」、「漁業集落」を地図上にプロットし、エレメントの相互関係を図化することで空間構成を抽出した。その後、5つの空間構成を照らし合わせ空間構成の共通点をみつけ図化し空間図式を抽出した。（図1.3）

これは、主要な路地や集落の一定の形式と、路地の序列を示している。路地にはすでに前述のような特徴があり、その序列によって路地の特徴も異なると考えられた。そのため本論文では卒業論文（注3）で取り上げた空間図式に基づき軸となる中央路地と直交する路地、その他の路地を選定し、その特徴を明らかにしようと試みた。

注3

野並和紗

平成20年度卒業論文 三

重県の漁業集落にみる空間
図式の地形への適応

集落の配置および定位分析
を通じて

選定の条件は以下の通りである。

- ・ 漁業集落内の軸（中央路地）
- ・ 軸に直交する複数の路地（軸中央部、軸端部で交わるものを原則として選定する。）

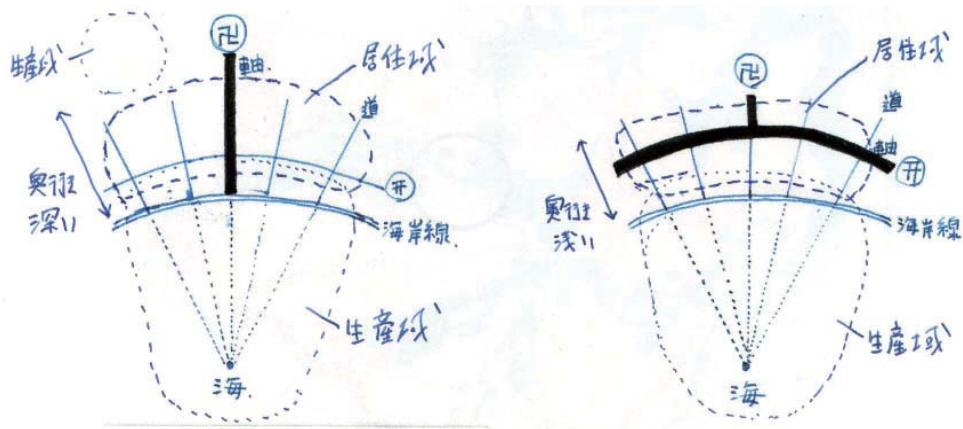


図 1. 3 空間図式

また、対象となる集落も卒業論文（注 3）で扱った漁業集落を対象とする。（表 1. 2、
図 1. 4）

選定方法

- ①三重県の第 1,2,3,4 種または特定第 3 種漁港である全 73 港の中から選定
＝漁港として一般に認知されているものを選定するため
- ②一つの集落の範囲がはっきりとわかる集落
＝空間構成を抽出するときに、他の集落の影響を排除するため
- ③なるべく集落と海の関係がそれぞれ異なった方角の集落
＝方角により集落の空間構成は異なるのかどうかを見るため

表 1. 2 調査対象漁港・概要

漁港名	住所	人口	漁港種類	漁港の方角	領域の明確さ
答志	鳥羽市答志町答志	1,433 人	第 2 種	北東	△
阿曾浦	度会郡南伊勢町阿曾浦	1,184 人	第 2 種	北、東	○
古和浦	度会郡南伊勢町古和浦	1,106 人	第 1 種	南	○
島勝浦	北牟婁郡紀北海山地区島勝浦	563 人	第 2 種	北、西	○
九木	尾鷲市九鬼町	647 人	第 2 種	南	○

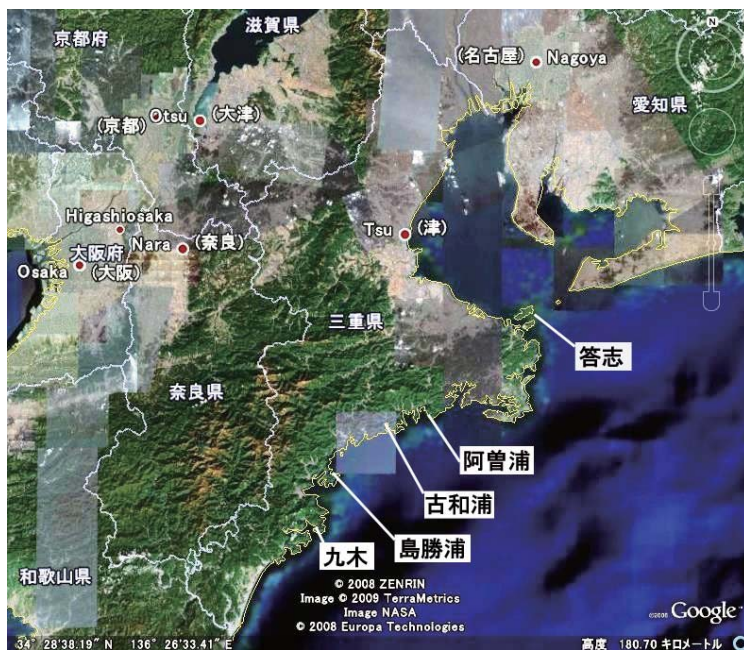


図1.4 漁港の位置 (Google Earth より)

・ 答志漁港

人口も多く5つの漁港のなかで最も活気がある。八幡神社に向けて土地が突出するような格好になっていて、集落は三角形のような形をしている。海女や九鬼嘉隆などの文化もあり、観光客の量も多い。答志漁港は外海に面しているため、天候による被害は大きいようで、堤防の整備が大々的に行われている。また、海上では愛知県とも繋がりがあり漁業関係者の出入りも他の漁業集落に比べ多いと言える。

・ 阿曾浦漁港

土地が細くなり海に突き出したところに集落がある。また、平地が隣接して2か所あるため集落は分断された格好となっている。どちらも海をコの字に囲い家と家が海を挟んで対面するように建っている。2つの地域の分かれ目は堤防で遮断されており店舗がある南側の域へ北側の域の人々が訪れる格好となっている。

・ 古和浦漁港

川、山、海が囲いとなり綺麗な三角形の土地に集落がある。道が綺麗に通っていて、集落の密度は他の漁業集落に比べて低いといえる。このため、住宅の建て替えが他の集落よりやりやすく、新しい家が多い。幹線道路も通っており車の移動はしやすい。

・ 島勝漁港

人の手のように、山と山の間に集落が広がっている。主に地図で見ると山の西側の部分に家が密集している。過疎が進んでいるらしく、神社の近くに空き地、空家もある。トンネルが建設され山を抜け海岸が整備されている。

・ 九木漁港

集落は海山に囲われ海があるのに非常に見通しも遮られた集落である。斜面がかなり海に迫っているため、平地が少なく、道より階段が多いぐらいの集落である。この地形のため、道はあまり秩序だって作られてはいない。尾鷲市街地と近いため循環バスや長距離バス、鉄道で他の地域と繋がっているが移動はしにくい。

ほとんどの漁業集落が空きやや過疎化が進んでいる。中学校や小学校が廃校になり子供の数が減少している。

1.4.4 対象集落の分析（2章、3章）

対象集落の選定した路地に対して以下のことを行う。

- 1：歩行者の視覚距離の変化
- 2：可視距離の変化から可視範囲の距離転換点を明らかにする
- 3：対象集落内路地の特徴をまとめる

以上のことを念頭に置き分析を行う。

まず、調査を行う自分自身が漁業集落の来訪者の立場である点はこちらに表明しておく。調査対象の路地を来訪者の視点に立ち、始点から終点まで調査を行うこととする。1は図1.5の様に表記する。

可視距離＝路地内の任意の地点からの最大の見通し距離

路地端部から10m毎に対象路地を測定。測定の始まりの地点を始点、終わりを終点とする。CAD上で可視距離が最大になる様、距離を測定し、その距離を直線で表す。このとき敷地境界線を基準とする。（建物が基本的に敷地境界の限界にあるため建物でなく敷地境界を基準にしてもその差は小さいと考えられるためである。）ただし、駐車場や空き地で、塀や樹木など明らかに視界を遮る要素が無い限りは敷地境界でなく可視距離の限界である障害物までとする。

これは漁業集落の路地で感じられる空間の奥行き感を表し、可視距離を連続して観察することでその変化と特徴を知ることができる。

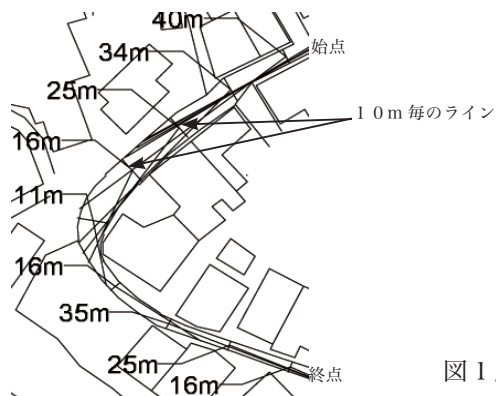


図1.5 測定例

2は可視距離が短い地点から突然、距離が増加に転じる点を転換点と名付ける。この点から次の点までの間は緩やかに可視範囲が重複しており歩行者は焦点にだんだん近づいていく事になり、視覚距離の減少が増加に転じる点は視界の変化を表している。可視距離の先きに観察される点を焦点とする。

多くの場合、路地の緩やかな曲がり角である。（図1.6）

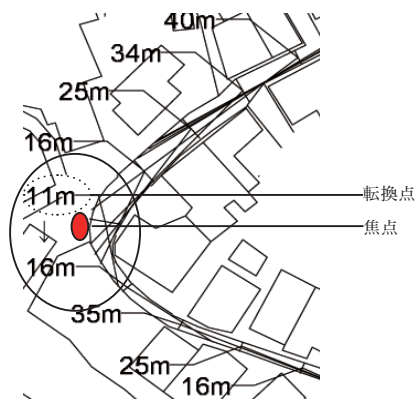


図 1. 6 転換点例

また、転換点から転換点を以下のように示す。

区間＝距離が短い地点から突然、距離が増加に転じる転換点から次の転換点までを示し、可視距離のまとまりを示す

これは可視距離が同一の変化を示している距離を表し、区間の数は路地での視界の劇的な変化の回数を表し、区間の距離は奥行き方向の領域感、まとまりを示している。

区間は視覚的展開の大まかな展開を示す事となる。

その他に、空き地等により可視距離は変化しないが可視範囲内で空の面積が劇的に変化したり、建物以外の要素が登場することで可視範囲に変化、区間内に注目を与える地点を変観点とする。(図 1. 7)



図 1. 7 変観点例

以上のことをまとめると図 1. 8 の様になる。

始点から終点までの中に転換点により区切られる区間がある。さらに区間の中に可視範囲の変化や注目を集める地点、変観点が存在する。

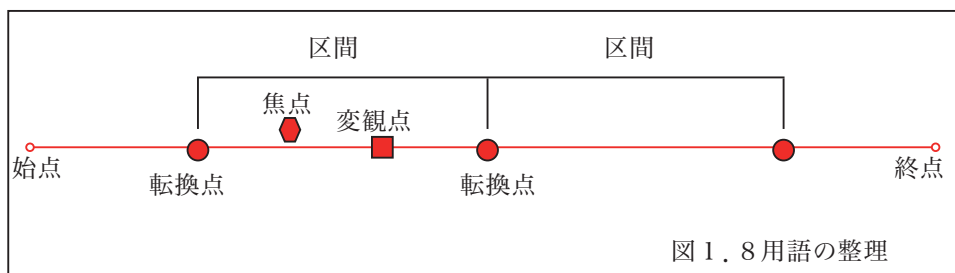


図 1. 8 用語の整理

3 はそれぞれの区間で可視距離の変化に伴い路地の特徴を強化する要素を抽出しその特徴をまとめる。

2 章 可視距離の分析

2.1 可視距離の測定

2.1.1 答志

2.1.2 阿曾浦

2.1.3 古和浦

2.1.4 島勝浦

2.1.5 九鬼

2.2 可視距離の変化と焦点

2.2.1 焦点となる建物の用途

2.2.2 可視距離の比較

2.2.3 可視距離の変化

2.3 まとめ

2章 可視距離の分析

2.1 可視距離の測定

2.1.1 答志

答志の路地は全体的に細く家屋が迫って建つようになっているのが特徴である。(図2.1)

①軸に直交する路地

最大距離 70m

最小距離 4m

路地が中間部分で食い違っている事から2つの路地に分断されている。可視距離が減少から増加に転じる点が7カ所ある。それぞれ北から順に sw-a ~ sw-g とする。

sw-a: 始点から初めてのまかり角である。それまで、擁壁が焦点だがこの地点から道幅が狭くなり建物が焦点となる。また、それまでの上り坂が平坦な路地になり集落の中に本格的に入っていくことを予感させる。(写真2.1)

sw-b: この地点は空き地を正面にし、次の曲がり角があるがその先が見えない。建物1(図2.1参照)が路地にやや突出することで焦点となり可視距離を遮っている。(写真2.2) また、この地点には空き地=変観点が存在する。(図2.1参照)

sw-c: それまで見えなかった商店の軒が見え焦点となっている。これまでの地点と異なりさらに路地が狭くなり両側の建物の2階部分が視界に入りにくくなる。しかし、視線の先の路地に影が落ちていないため明るさを感じる。(写真2.3)

sw-d: この地点は前後の地点とほぼ見えている対象が変わらず道幅の変化が可視距離の増減に寄与したと考えられる。

sw-e: この地点は正面に建物があり完全に次への繋がりを分断している。この先きは中央路地が通っており、そちらが優先されたと考えられる。(写真2.4)

sw-f: 緩やかに曲がる路地の格好から可視距離が増減しているが、激しい変化ではない。(写真2.5)

sw-g: 山が視界の上に入り路地の終点が近い事を感じるが、やはり緩やかな曲線の路地から、激しい可視距離の変化とならない。(写真2.6)

それぞれの地点の変化の要因は路地の曲がり終わりである事、建物による路地の切断があることがわかる。また、焦点となる建物も正面にあることや、わざと突出しているなどパターンがある。



写真2.1



写真2.2



写真2.3



写真2.4



写真2.5



写真2.6

②軸

最大距離 8.8 m

最小距離 8 m

南に向かいのびる路地で和具に繋がっている。そのため直線的で曲がりくねっていない。軸に直交する路地より幅が広く、非常に見通しがよく可視距離も長い。やはり、路地中央付近に路地を分断する地点があり2つの路地に分かれる。可視距離が減少から増加に転じる点は2カ所 (ns-A, ns-B) ある。

ns-A: 始点から少しずつ距離を縮めてきた限界の地点である。ここでは路地西側の敷地が変則的に突出しているためここが焦点となった。(写真2.7)

ns-B: 上り坂のため建物の基礎や一階が視界に入る。焦点は石積みの擁壁となる。(写真2.8)



写真2.7



写真2.8

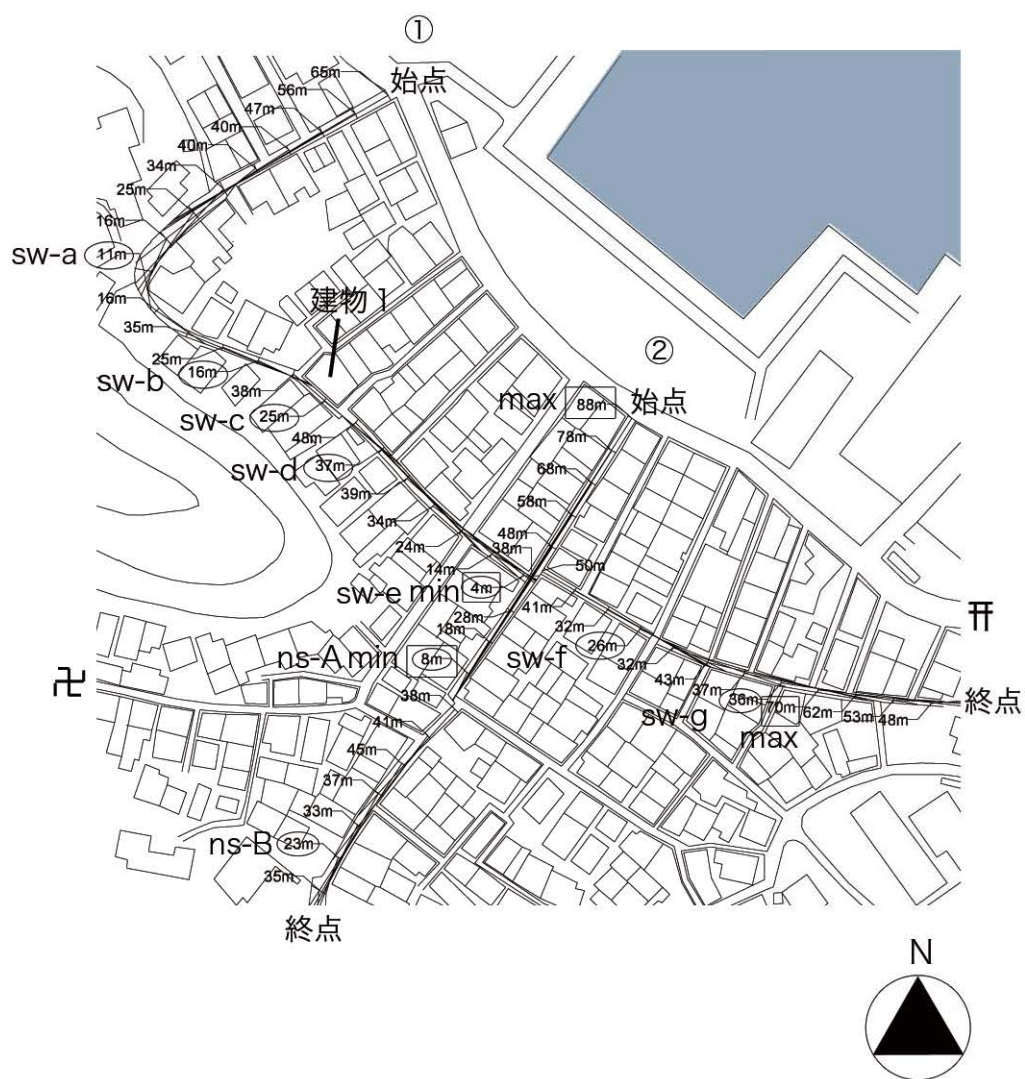


図2. 1 答志 (1/2000)

2.1.2 阿曾浦

阿曾浦の路地は全体的に細く家屋が迫って建つが、建物の階数が様々で地形の高低差から迫っていないと感じられる場所もある。また、地域が二つに分断されており、海岸沿いの道路によってのみ繋がっている。(図2.2)

①軸に直交する路地

路地 A

最大距離 49m

最小距離 5m

路地が90度に曲がる地点が4カ所あり段階的に狭くなる地形に合わせている。可視距離が減少から増加に転じる点は2カ所あり、それぞれ we-a, we-b とする。

we-a: 曲がり角を曲がった直後の地点だが、次の曲がり角がすぐに出現するため可視距離が短い。(写真2.9)

we-b: 曲がり角のため徐々に距離を縮めその最後の地点である。(写真2.10)



写真2.9



写真2.10



写真2.11

路地 B

最大距離 55m

最小距離 3m

緩やかな曲線を描き、やや太めの路地が南北に通っている。滑らかな曲線ではなく敷地の突出や後退により路地の太さが少しずつ変化している。可視距離が減少から増加に転じる点は3カ所ありそれぞれ、ns-a, ns-b, ns-c とする。

ns-c: 東西に伸びる路地と路地 B が交わる付近の地点である。建物によって路地が連続しておらず、焦点に最も近い地点である。

ns-d: 全体的に見通しが良いが敷地 1 がやや突出しているため可視距離の増減が起きたと言える。

ns-e: 中央路地が優先され建物が焦点である。軸の幅員が広いいため視界が開ける。(写真2.11)

②軸

最大距離 8.6 m

最小距離 7 m

集落が二つに分断されているため、それを繋ぐ道路上で最大距離の地点が観察された。南北の集落内のみそれぞれ見た場合、中央路地北側の 8.3 m となる。いずれにしても比較の見通しが良い。可視距離が減少から増加に転じる点は 13カ所あり、we-A～we-N までである。

we-A: 緩やかな曲線の路地で見通しが良さそうだが最後までは見通せない。路地西側の敷地の膨らみの頂点付近のためやや見通しが悪い。

we-B: この域内で路地が s 字に曲がっているため再び可視距離が短くなる地点である。しかし ws-A と違い、あまり路地が曲がっていないため見通しがそれなりに確保されている。

we-C: s 字カーブを抜けてこの集落の端が見え始め、徐々に距離が縮まる最終地点である。ここを抜けるとこの集落を抜け繋ぐ道路に出てしまう。このため焦点は堤防となる。(写真 2.13)

we-D: 繋ぐ道路上の地点で次の域はまだ見えない。

we-E: 次の南側の集落がようやく見えてくる地点。焦点の郵便局の青い建物が目につく。(写真 2.14)

we-F: 連続して 2 地点で同じ可視距離が測定された。この道路の先きまで見通せるようになる。

we-G: 視界に路地の端点が入るようになる。また、建物が建っている敷地がこの道路上よりも海拔が低いいため家の屋根が転落防止の柵の奥に連続して見る事ができる。(写真 2.15: この地点よりさらに 50 m ほど道路を進んだところである。)

we-H: この路地の端点で下り坂のため奥の建物の屋根を見下ろす地点である。奥に見える茶色の壁体の建物が焦点となり可視距離を遮っている。(写真 2.16)

we-I: we-A 同様、見通しが良く、焦点となる建物がはっきり確認できない可視距離である。(写真 2.17)

we-J: この路地の一つ目のカーブを通り抜けた直後の地点である。ここは右折すると湾が見える広い通りに出るため前方右手が明るい。焦点は奥に見える茶の建物となっている。(写真 2.18)

we-K: 寺へ向かう路地だが、we-J と違い路地の幅が狭くなっている。このため、可視範囲が全体的に短い。そのため、寺に向かっているが、路地西側の山肌を見ることも無く進んでいく。



写真 2.13



写真 2.14



写真 2.15



写真 2.16



写真 2.17



写真 2.18

we-L: この地点は we-K とあまり差はなく、緩やかな曲線を描く路地による影響だと考えられる。この地点でもまだ寺へ続く階段は現れない。代わりに建物が途切れた先に空が見え路地の終わりを予感させる。焦点はやはり奥の茶色い建物となる。

we-M: 寺の階段が見え路地が連続して続くのか、終点なのか判断がつかない地点である。この地点では焦点に寺の階段があげられ、寺へ行くことを促される。(写真2.19)

we-N: この地点は寺へ続く階段の東側を抜け海岸線へ出るための最後の曲がり角で家が焦点となる。



写真2.19



図2. 2 阿曾浦 (1/2000)

2. 1. 3 古和浦

古和浦の路地は全体的に広く整然とし、塀が目立つ。南北に伸びる路地は緩やかな曲線だが東西に伸びる路地は幅員の広いものから、かなり狭く曲がりくねっているものまで様々である。(図2.3)

①軸に直交する路地

路地 A

最大距離 33 m

最小距離 7 m

この路地の終点は神社で社までを終点としている。可視距離が減少から増加に転じている点は3カ所ある。それぞれ we-a, we-b とする。非常に路地が狭く裏路地的な扱いである。

we-a: 塀の向こう側にある住宅が焦点となっている。(写真2.20)

we-b: 坂を登る途中なので、住宅の基礎部分が目につく。焦点は住宅となる。

we-c: 最後の曲がり角で上り坂で建物が密に建っていないため見通しが良い。山を焦点としている。(写真2.21)



写真2.20



写真2.21

路地 B

最大距離 194 m

最小距離 7 m

あまり路地が曲がっておらず見通しが良い。路地の終点付近で北側の敷地が突出しているため転換点が1カ所ある。

we-d: 190 m の間、同じ建物を焦点としこの地点までくる。この地点で終点と考えていたが曲がり角で路地が続いていることがわかる。

②軸

最大距離 146m

最小距離 14m

路地幅も広く全体的に緩やかな曲線のため可視距離が非常に長い。郵便局がある建物1で路地全体が2つに区切れている事が解る。可視距離が減少から増加に転じる地点は8カ所あり ns-A ～ ns-H とする。

ns-A: 始点付近で少しずつカーブを抜けていく途中である。この地点からは郵便局は全く見えず、赤い建物が焦点となっている。(写真2.22)

ns-B, ns-C: この地点でもカーブを抜ける事ができず10m 毎ごとに焦点がどんどん変化していき終点が検討つかない。

ns-D: 郵便局がはっきり見え、二つの路地が交わる付近のため左右の見通しが良い。

ns-E: 郵便局を抜けて見通しが良くなり、この地点からは前の地点の幅員より広いいため見通しが良い。焦点となる他つてものが確認できない。(写真2.23)

ns-F: 橋の上から寺に通じる路地の入り口を見通すことができる。また、橋の北側の土地は低いため屋根が見える。写真2.24は橋から正面を見たものである。

ns-G: 広い空き地が正面に見え路地の終点を感じさせる。(写真2.25)

ns-H: 山を焦点とし先へ進むことを促される地点である。先きに寺があることは住民の人々以外は解らない。(写真2.26)



写真2.22



写真2.23



写真2.24



写真2.25



写真2.26

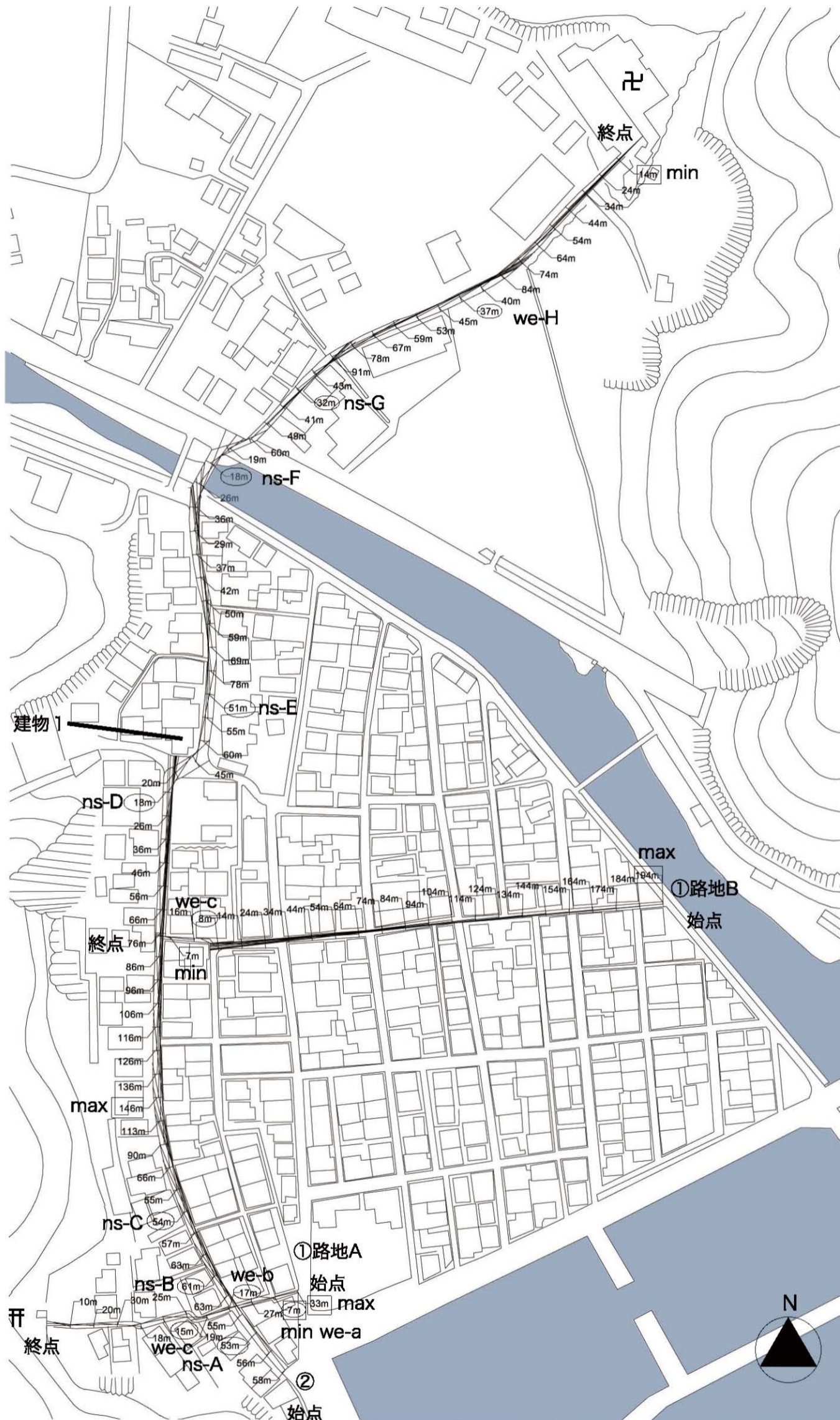


図2. 3 古和浦 (1/2000)

2. 1. 4 島勝浦

島勝浦の路地は地形に合わせ曲がりくねっており場所によって高い建物があるため視界が突然、遮られる。(図2. 4)



写真2. 27

①軸に直交する路地

路地 A

最大距離 3 5 m

最小距離 5 m

最も北側の路地である。曲がり角が2つあり見通しが悪い。転換点は2カ所ある。それぞれ we-a, we-b とする。



写真2. 28

we-a, we-b: どちらも2カ所の曲がり角によって可視距離の変化が起きている。また、上り坂のため可視距離は短くなるが、視界は開けている。

路地 B

最大距離 1 1 8 m

最小距離 3 0 m

神社に海岸から通じる通りで非常に道幅が広い。しかし所々敷地が突出、後退しているため、路地の中程に居たらなければ鳥居を確認できない。転換点は2カ所ある。それぞれ、ns-c, ns-d とする。

ns-c: 可視距離の限界を考えると神社の敷地の横に通る路地まで見通せる。しかし、鳥居に注目が集まり焦点がずれる。(写真2. 27)

ns-d: ns-c 同様、神社脇の路地に焦点が集まる。そして正面に神社へ渡る橋があり、焦点は神社にずれる。(写真2. 28)

②軸

最大距離 124m

最小距離 11m

集落を端から端まで通る路地で、地形に沿って曲がっている。寺付近で路地が交わることから視界が開け、神社へ繋がる路地を超えるまでは、非常に視界が開けている。また、可視距離が減少から増加に転じる地点は13カ所ある。それぞれ、ns-A～ns-Mとする。

ns-A: この路地の始点からすぐの曲がり角で、まだ視界が開けている。白い家が焦点となっている。(写真2.29)

ns-B: 大きく湾曲している路地の頂点に近く、この地点からは焦点が建物で見通しが利かない。

ns-C: ns-B同様、湾曲した路地の頂点に近く、正面に旅館の建物が見える。この旅館が他の建物より圧倒的に高さが高く、この地点前から建物上部が確認されており、この地点でははっきりと全体が確認できるようになる。(写真2.30)

ns-D: 曲がり角で視界が遮られる。路地の角度から正面に山が見え、その下の建物が焦点となっている。(写真2.31)

ns-E: 路地が曲がり周辺の敷地の形から寺の前の広場のようにになっている。そのため焦点になる建物の周辺が明るく路地が開けることがわかる。(写真2.32)

ns-F: この地点は次の角を曲がると細い路地があることが距離の短さからわかる地点である。

ns-G: この地点の前とは変わり、幅員が少し広いため明るい。路地東側が空き地と奥に漁業組合の建物があり開け居ているが西側と焦点となる前方は建物が密に建ち並び対照的な地点である。

ns-H: 正面に山が見え、この集落に訪れて最初に通る場所が見える。視線の先きが駐車場であう。そのため駐車場を超えた小屋が焦点となる。

ns-I: この地点からはこの道の先きを見通すことはできない。焦点には角地の住宅が見える。

ns-J: 幅員が広いため、二股に分かれる地点が見えている。焦点には山と空き地が見える。(写真2.33)

ns-K: ここまでは二股に道が分かれることは解っているがはっきりとは確認できていなかった。しかしこの地点の次の地点から焦点が太い通りから狭い路地に移る。この境目の点で、焦点に山が見えている。



写真2.29



写真2.30



写真2.31



写真2.32



写真2.33

ns-L: この地点の前は狭い路地がやや見通せたが、この地点では既に路地に入ろうと曲るため路地東側の端にある建物が焦点となり視線を受け止める。(写真2.34)

ns-M: 非常に狭い路地だが直線で見通しが良く焦点が樹木となり、その先に山と空き地が見える。



写真2.34

2.1.5 九鬼

九鬼の路地は全体的に均一な幅員で家屋が迫って建つのではなく塀があり、やや開けた印象になる。答志に比べ建物の高さも低く路地も広いため場所によっては非常に開けている地点もある。しかしい集落の正面も背後も山があり路地は終日、影が色濃く落ちている。(図2.4)

①軸に直交する路地

路地 A

最大距離 3.1 m

最小距離 1.2 m

焦点に交わる路地に面した建物が見えている。また直線のため可視距離は減少するのみである。このため、可視距離の減少から増加にてんじる点はない。漁業組合の建物の影が落ちており、暗い印象で西に向かう路地は見えない。

路地 B

最大距離 2.5 m

最小距離 5 m

焦点には役場の建物があり役場への道となっている。(写真2.35) 見通しが良く海岸線の道路からも建物が確認できる。建物の格好も他の建物と違い棲入り、黄色く掲示板などがあることから目を引く建物である。

この2つの路地を含め、他の路地も海岸線から中央路地に交わる路地はほぼ直線し、対照的に見通しが良い。



写真2.35



写真2.36



写真2.37



写真2.38



写真2.39

②軸

最大距離 9.6 m

最小距離 3 m

非常に曲がりくねった路地で等高線とほぼ同じ格好で路地ができている。また、路地内は暗く特に漁業組合の裏に当たる地点は難しいです。転換点は23カ所ある。それぞれ、we-A～we-Wとする。

we-A: 神社の脇を抜けて、この路地に入る。正面に窓がある建物が焦点となり路地の閉鎖度が下がる。(写真2.36)

we-B: この地点から右に折れる路地がある。小学校へ繋がる階段があり路地に看板が設置されている。正面の住宅が焦点となっている。

we-C: この地点も we-B と同様、T 字路になっており完全に視界が遮断されている。焦点に白い建物がある。(写真2.37)

we-D,we-E: ここからカーブを抜けるまで可視距離がどんどん変化していく。10m進むごとに焦点が変わる。(写真2.38)

we-F,we-G: どちらも緩やかな曲線で、焦点は住宅となる。建物が密集しており路地の壁のようになっている。(写真2.39)

we-H: 建物の高さが全体的に低く、塀と軒先が見える。可視距離がカーブによって限界まで縮められた地点。焦点に住宅が見える。(写真2.40)

we-I:we-H から抜けて直線の路地になり可視距離が長くなり段階的に短くなってきた最終地点である。焦点が正面の住宅の玄関となる。(写真2.41)

we-J: 寺から通じる路地ぞいの住宅が正面に見えている。しかし左側に路地が続いている事もわかる地点である。

we-K: 路地東側に空き地が広がっており明るい、板塀の建物と看板が目につく。先きが見えず曲がり角の頂点である。焦点は板塀の建物である。(写真2.42)

we-L: 焦点に路地東側から突出し見える住宅の側面が見える。

we-M: 路地 A が確認でき焦点に漁業組合の建物がある。住宅より高さが高いため海や空を確認する事ができない。

we-N: これまで頻繁に急な角度で曲がり角が登場していたが、緩やかなカーブになり距離の長い可視距離が連続している。この地点では緩やかな曲がり角の頂点付近で路地北側の突出した敷地により可視距離が短くなっている。(写真2.43)



写真2.36



写真2.37



写真2.38



写真2.39



写真2.40

we-O,we-P: 建物により路地が遮断される地点である。正面に住宅の壁が見え路地の続きが見えない。(写真2.44)

we-Q: 路地北側に空き地がありその奥に焦点となる茶色の住宅が見える。

we-R: 曲がり角の終わりで次に開けるのがわかるが、住宅が焦点となり可視距離が短くなっている。

we-S,we-T: それぞれ、良く似た可視距離の地点である。住宅が焦点になるが、住宅で1m以上の擁壁の上に建物が建っており焦点となるものは住宅の基壇となる。住宅の格好が変化している。(写真2.45)

we-U,we-V: これも we-S,we-T 同様、良く似た可視距離の地点である。どちらも焦点に住宅が見えている。

we-W: 正面に赤い建物が見え横の中学校のグラウンドが見える。路地北側が擁壁で建物が減り路地の終点に近いことがわかる。(写真2.46)



写真2.46



写真2.41



写真2.42



写真2.43



写真2.44



写真2.45



図2. 5 九鬼 (1/2000)

2.2 可視距離の変化と焦点

2.2.1 焦点となる建物の用途

可視距離の変化と共に焦点となる要素も変化していく。5つの漁業集落で取り上げた可視距離が減少から増加に変化する地点は計79カ所あり、その内の66カ所は住宅が焦点となっている。住宅でも側面の壁や玄関、基壇、擁壁など種類があることがわかる。住宅が多い中、焦点は役場や鳥居、寺へ通じる階段、郵便局、祭りの舞台など公共性の高い施設が確認された。(図2.6)

漁業集落名	路地	住宅	店舗	店舗以外の施設	その他建物	建物以外	自然	その他	合計	備考
答志	①	6	1	0	0	0	0	0	7	
	②	1	0	0	0	1	0	0	2	擁壁
阿曾浦	①	5	0	0	0	0	0	0	5	
	②	9	0	1	0	3	0	0	13	郵便局、堤防、寺へ続く階段
古和浦	①	3	0	0	0	0	1	0	4	山
	②	6	0	2	0	0	0	0	8	郵便局、電話交換所
島勝浦	①	4	0	0	0	0	0	0	4	4軒中2軒の住宅→鳥居に変化
	②	10	1	0	1	0	1	0	13	木、小屋、店
九鬼	①	0	0	0	0	0	0	0	0	
	②	22	0	1	0	0	0	0	23	漁業組合
合計		66	2	4	1	4	2	0	79	

①：軸に直交する路地／②：軸となる路地

図2.6 焦点の種類

郵便局、店舗、漁業組合など集落の中で重要な施設が焦点に存在している。

答志①では曲がり角を曲がるたびに異なる格好の建物が見え店舗のオレンジの軒が視線の先に見える。焦点が軸に集まり非常に見通しが良いことから答志では住宅以外の要素が焦点になる確率は低かった。

しかし、他の漁業集落では多数確認された。阿曾浦②では寺への入り口である階段を焦点とする地点がある。これは視線に止まりやすい場所に寺が配置されていると考えられる。古和浦②では路地が開けてしまい分断される地点に郵便局が突出して建てられている。この地点より中央路地の南側から郵便局までの間、郵便局は焦点として見えている。

また、島勝浦①では路地Bが神社へ続く道で、焦点は神社西側の住宅となる。しかし、実際は鳥居に視線が止まり焦点がずれることになる。焦点はずれるが重要な施設が視線の範囲内に配置されていることになる。また、島勝浦②では寺付近の路地が開ける地点でも店舗が焦点になるなど目につきやすい地点に配置されている。

さらに、九鬼①は可視距離の変化する地点がないが役場が視線の先きにあるなど図2.6以外の場所でも観察された。

このように路地を歩行中、目につく地点に店舗等の施設を配置し、路地の中での風景の単調さが防がれている。このような住宅以外の用途の建物が確認されるのは②の軸となる路地上での確率が高いことも図2.6からわかる。

このような焦点の存在は地割りの変則さが原因の一つであると考えられる。

2.2.2 可視距離の比較

2.1で可視距離の測定を行ったが可視距離の最大距離から集落は2つに分類できる。最大距離の大きさは集落の見通しの良さを表している。この最大距離が古和浦と島勝浦はどちらも他の漁業集落と比べ非常に長いことがわかる。

古和浦、島勝浦どちらの漁業集落も集落内の路地が緩やかな曲線でできているところが多く、地割りの形状の影響を受けにくい。また集落の形状が南北に伸びる格好であるため、東西に伸びる九鬼や答志と違い、直線に近い路地が取りやすい点も可視距離の長さに繋がったと言える。

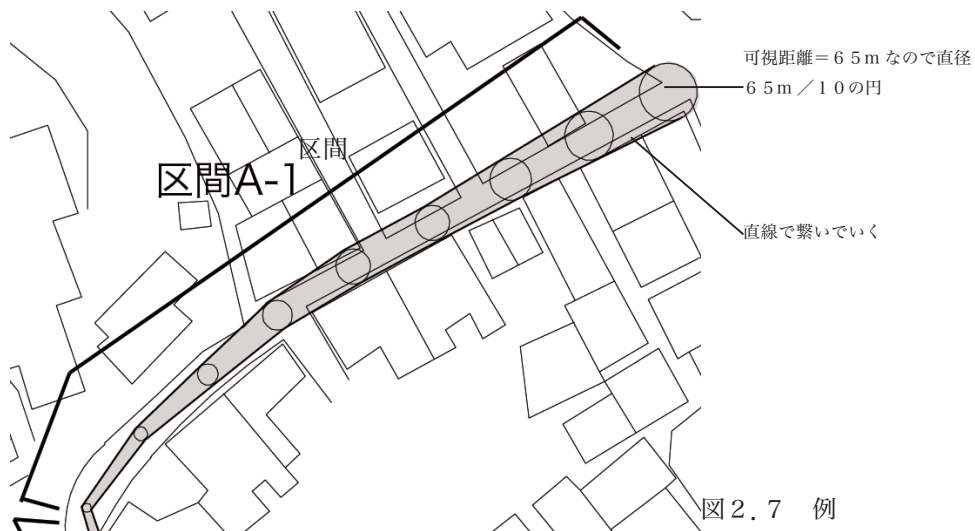
一方、答志・阿曾浦・九鬼はどの集落も東西に集落が広い傾向にあり地形の影響を受け可視距離が短くなったと言える。

このように、可視距離も地形の影響を必ず受けており、集落の路地の特徴は地形による結果が大きいと言える。

2.2.3 可視距離の変化

可視距離の増減を見ていると多くの路地で最大距離と最小距離の落差が激しいことがわかる。見通しが良い地点と悪い地点がどのように分布しているか観察する。

観察するにあたり可視距離を視覚的に確認しやすいよう図に置き換える。地図上で可視距離／10を直径にし円を描き、円を接線で繋いでいく。これにより図の膨らみで距離の増減を示す。また区間も示す。(例：図2.7) 結果は図2.8～2.12の通りである。



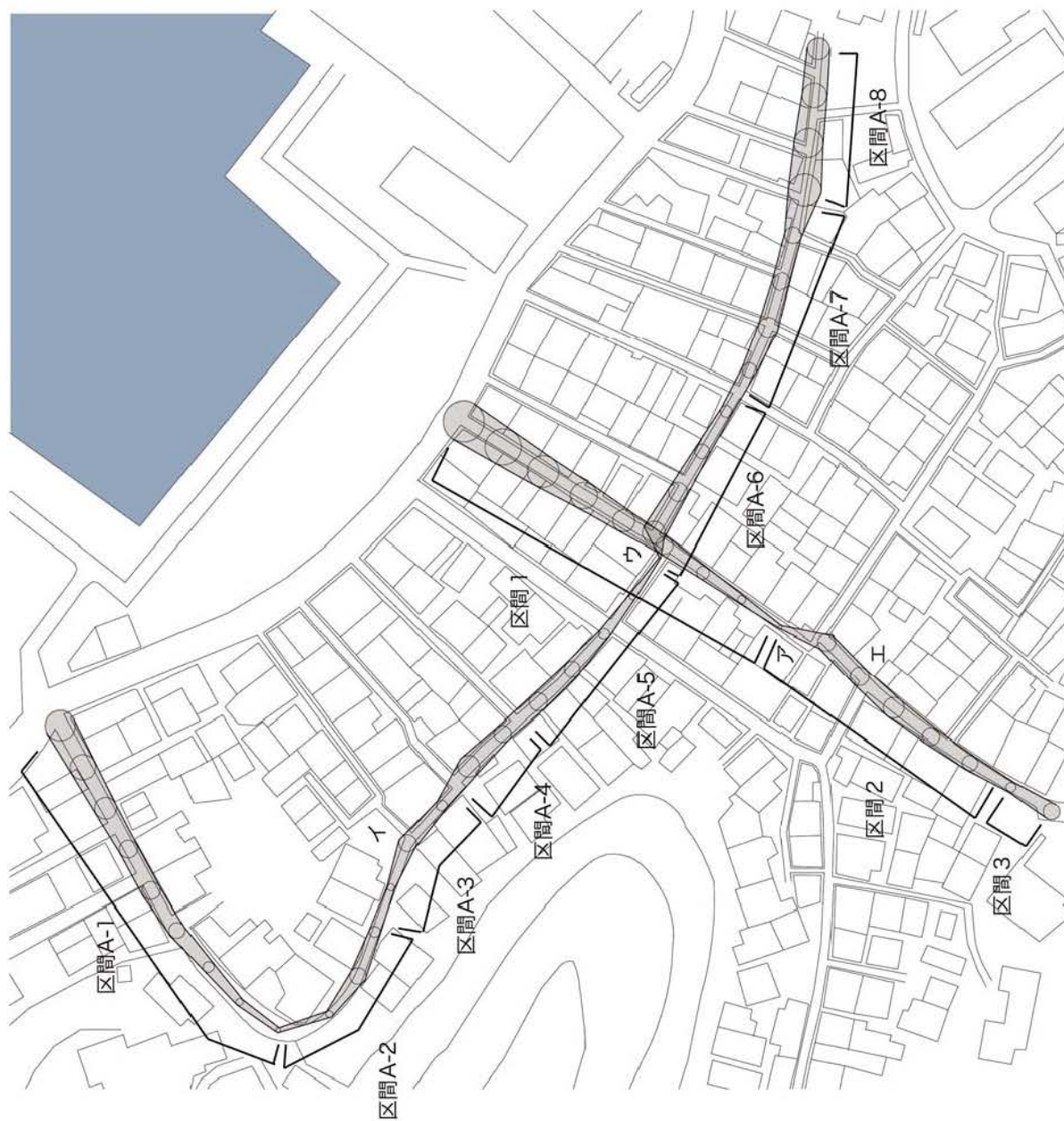


図 2. 8 答 志

それぞれの集落は緩やかだが、かなり可視距離の変化があることがわかる。

それぞれの集落の区間は次の事が言える。

・答志：②軸は可視距離の測定範囲を密集度が低下する直前までしか測定をしていないが、3分割されている。軸には店舗や答志舞台などがある。この店舗の看板やのれん、軒を見通せるだけの可視距離の長さが必要な路地である。そのため区間1の終わりは軸上の店舗の終わりの地点でもある。(図2.8のア)

また、軸の区間は区間1は順に可視距離が減少していることがわかりやすい。しかし、区間2、3は微細な増減しか起こらず可視距離に変化が無い。

①軸に直交する路地は区間が8区間にわかれ、集落の中央付近は区間は多数存在するが可視距離の変化が2～6mほどで大きな変化は無いといえる。また、路地の始点、終点で可視距離が大きく、始点・終点ともに端点側から見通しの良い地点A→見通しの悪い地点B→ある程度見通せる地点Cの順に集落中心部へ近づいていることがわかる。このため、区間は4カ所にまとめる事ができる。(図2.9) 焦点とは別に可視範囲に変化を与える要素である変観点は区間A-1(空き地)、A-5(住宅による遮断)、1(空き地)で確認されている。(図2.8のイ、エ)

図2.8ウは路地が交差し中央路地が優先されている。

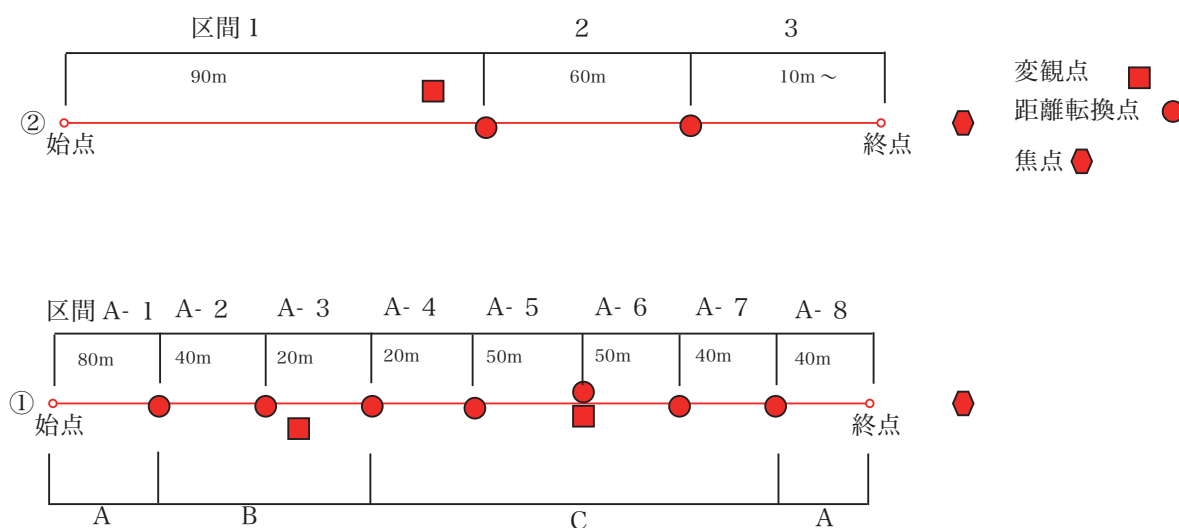


図2.9 答志略図



図2.10 阿曾浦

・阿曾浦：②軸では可視距離が劇的な変化は見せないが全体的に緩やかに区間が変化している。この集落では軸上に複数の店舗はあるが軸に直交する路地にも多く点在している。区間1は見通しが悪いが、区間2、3は可視距離の変化が6mほどでほぼ連続している。次に繋の道路では地形に沿いカーブしているため、ちょうど区間5の途中で、集落南側を確認可能になる。その後、区間6、7、8と連続して集落南側が確認できる。区間9からは再び路地に入るが区間9、10、11までは集落北側と似た傾向にある。路地に入る地点では見通しが良くないが、10mほど進むと見通しが良くなる。区間11～13までは海岸線が区間11の途中で確認できて以降、路地の幅員が狭くなるため見通しが悪く焦点となる寺に続く階段まで30～40mの見通しは悪くないが先きの解らない距離で推移する。区間14、15は海岸線へ出るための繋となる。

一方、①軸に直交する路地で路地Aは地形に合わせて変形する地割りのため短い距離ながら4区間に分かれている。それぞれ、曲がり角が原因のため区間同士は完全に分断されている。焦点が近いので非常に狭苦しい、迷路の様な区間の連続となっている。

逆に路地Bでは幅員が広いことから、区間が生まれにくい。地割りの関係上区間B-1と区間B-2の間に変観点が存在し、路地が分断され路地の終わりを予感させるよそがある。区間B-2とB-3はその差があまりなく緩やかに繋がっていることから一括りと考えられ、区間B-4は軸の北側となるため区間B-1同様分断されている。

以上のことから、①の路地の可視距離のグループは5つに分かれ、見通しが悪いB→見通しが良いA→繋D→見通しが悪いB→見通しが良いA→ある程度見通せるCと変化を遂げている。②は全体的に変化が単調でグループ化されにくい。

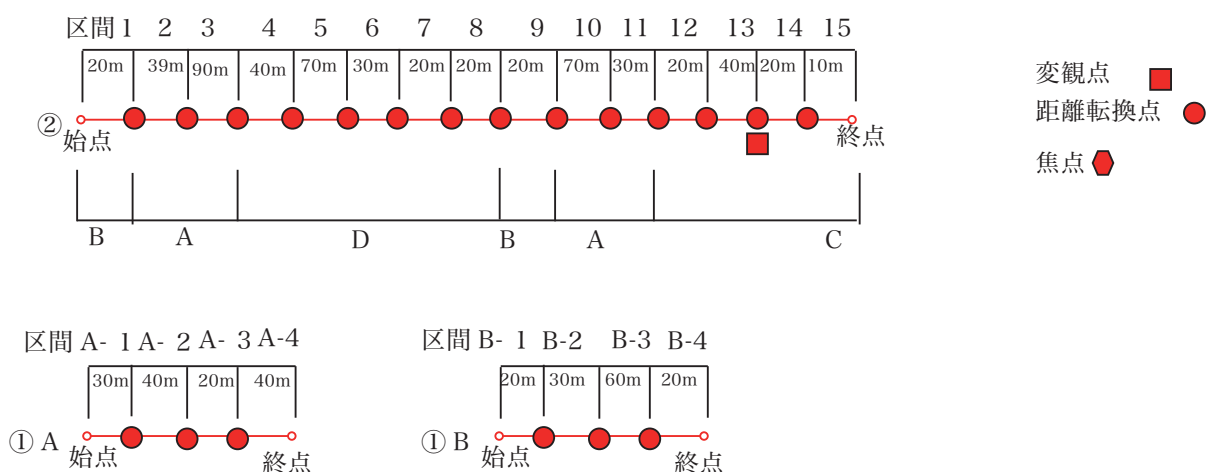


図2.11 阿曾浦略図

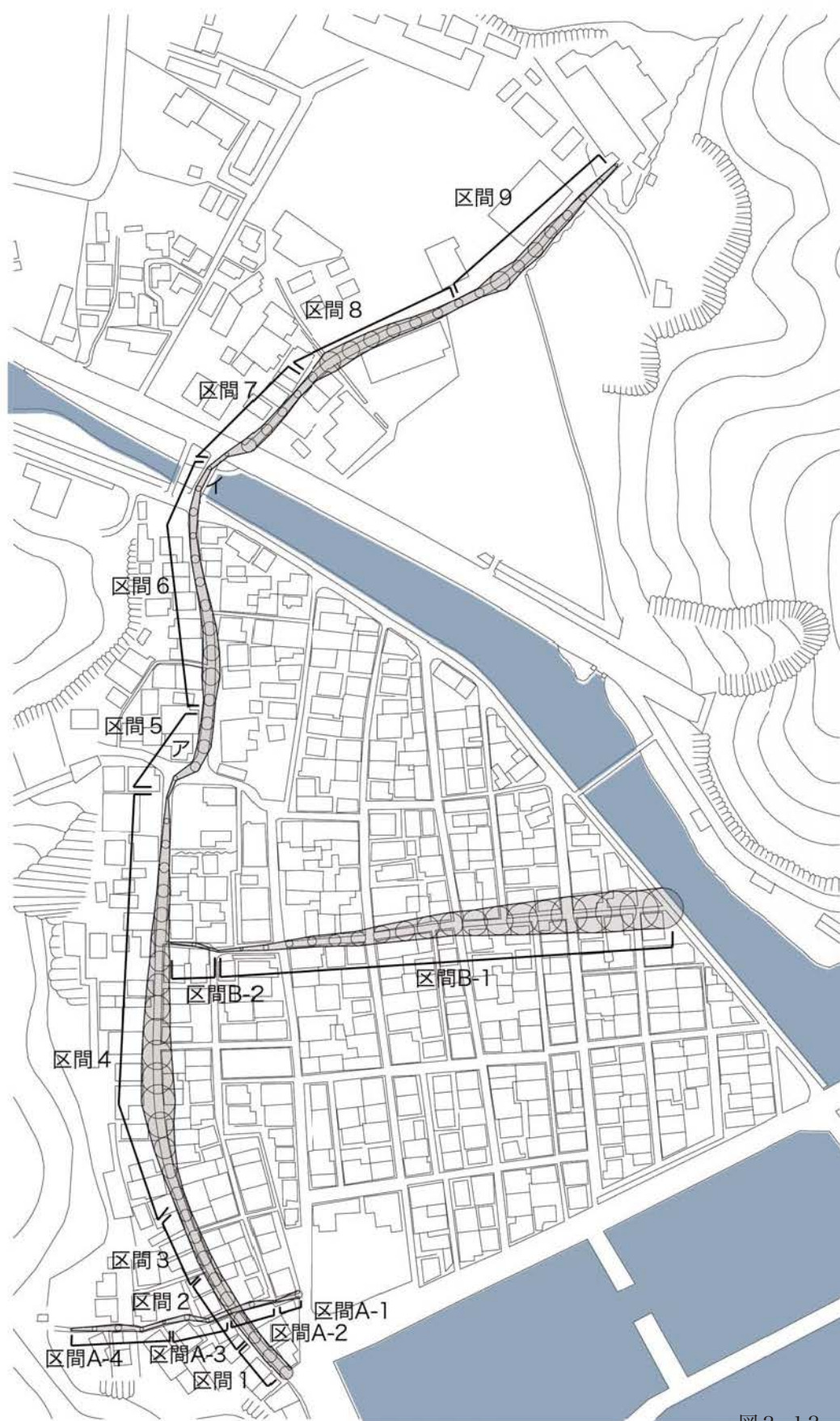


図2.12 古和浦

・古和浦：5集落のなかで最も可視距離の長い集落である。ほとんどの路地の幅員が3～4mとかなり広い。②軸では郵便局のある区間5がこの路地全体の分かれ目である。郵便局付近では路地が開け変観点がある。区間1～3は劇的な可視距離の変化も無くある程度見通せる（C）と言える。しかし、区間4は非常に見通しが良く（A）焦点である郵便局に向かい連続して減少してく。そして、区間5を経て90～20mの可視距離の緩やかな変化の区間（D）が連続して区間6、8、9と登場する。また郵便局と橋は可視範囲が劇的に変わる変観点といえる。（図2.12のア、イ）

一方、①軸と直交する路地Aは緩やかな上り坂と曲がり角の多さから可視距離の変化が4区間と短い距離ながら多い。また、裏路地なので非常に狭く見通しも悪い。路地Bは幅員が2.5m～4m前後と変化が激しいものの路地が直線に近いため、2区間にわかれる。始点から焦点が変わらず区間B-1は全体的に単調である。区間B-2は土地が突出しており路地が分断された結果生まれたといえる。このため、もし突出が無ければ200m以上一つの区間で見通すことができるといえる。逆に言うと見通しを遮るように最後に突出ができていともいえる。

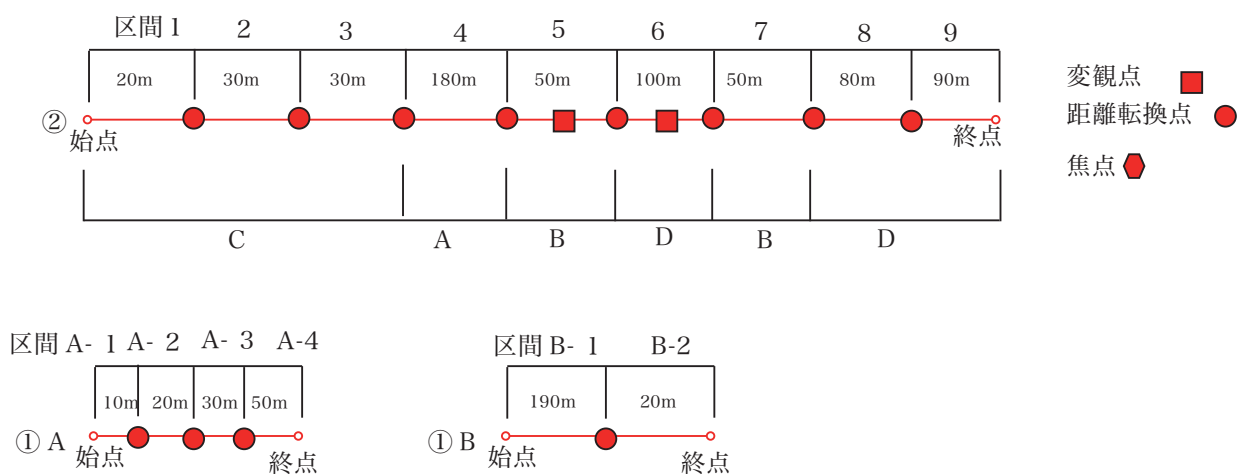


図2.13 阿曾浦略図

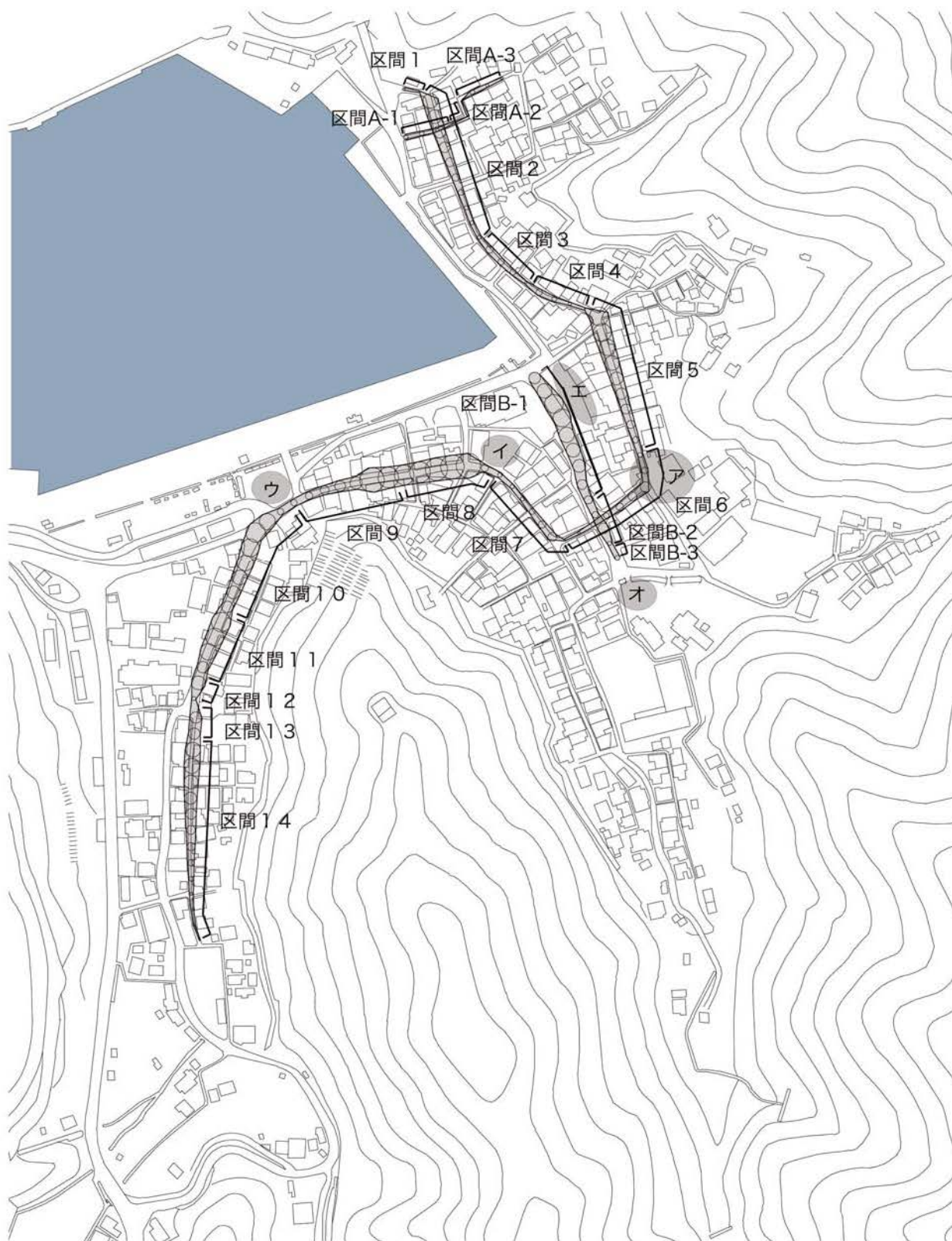


図2.14 島勝浦

一方、①軸に直交する路地 A では上り坂を上がり途中 90 度の角が 2 か所あるため、視界が開けず終止、可視距離が短い。しかし、区間 A-3 では上り坂も直線に近くなり、空が開け視界が開ける。路地 B では 3 つの区間にわかれる。区間 B-1 では路地東側の空き地 (エ) により視野が広がり、可視距離も長い。この区間の途中から区間 B-2,3 を含め焦点は住宅になるが神社の鳥居 (オ) が常に可視範囲に入り変観点となっている。これは終点まで続く。

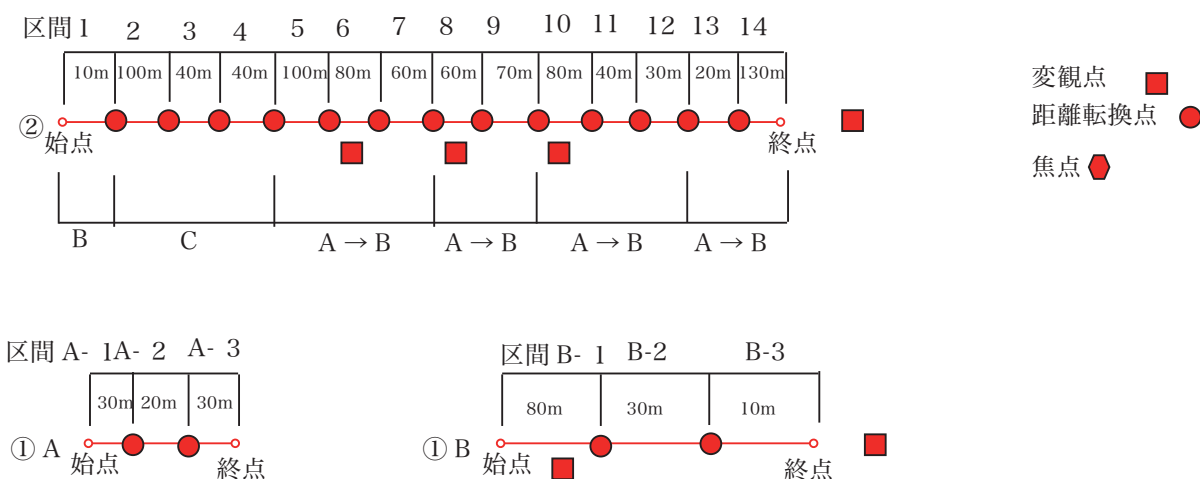




図2.16 九鬼

・九鬼：全体的に路地が均一で地形に沿い曲がりくねっている。このため転換点、区間も多く存在する。②軸は区間18までは可視距離の細かい増減を繰り返している。可視距離は長くても50m以内で、焦点も漁業組合のビルの背面以外は全て住宅である。一つの区間の距離も50m～70mの区間が多く、全体的に40m～20mほどの可視距離である程度見通すことができる（C）区間が多いことがいえる。区間19以降、路地が直線に近くなり可視距離が長くなる。区間18～23までは長距離から50m程度の距離まで可視距離が変化を繰り返す（A→B）。その間、視界に入る建物は塀が増え、基壇が高くなり擁壁等が視界に入りしだいに住宅の数が少なくなる。区間24は海と山が見え、路地北側の校庭が視野を一気に広げる（ア）。区間3、11ともに途中、空き地が現れ視野は広がる（イ、ウ）。

一方、①軸に直交する路地Aでは路地の距離の短さから始点から終点まで1つの区間である。焦点は住宅となる。路地Bは路地Aと同様だが焦点に役場を配置されている。

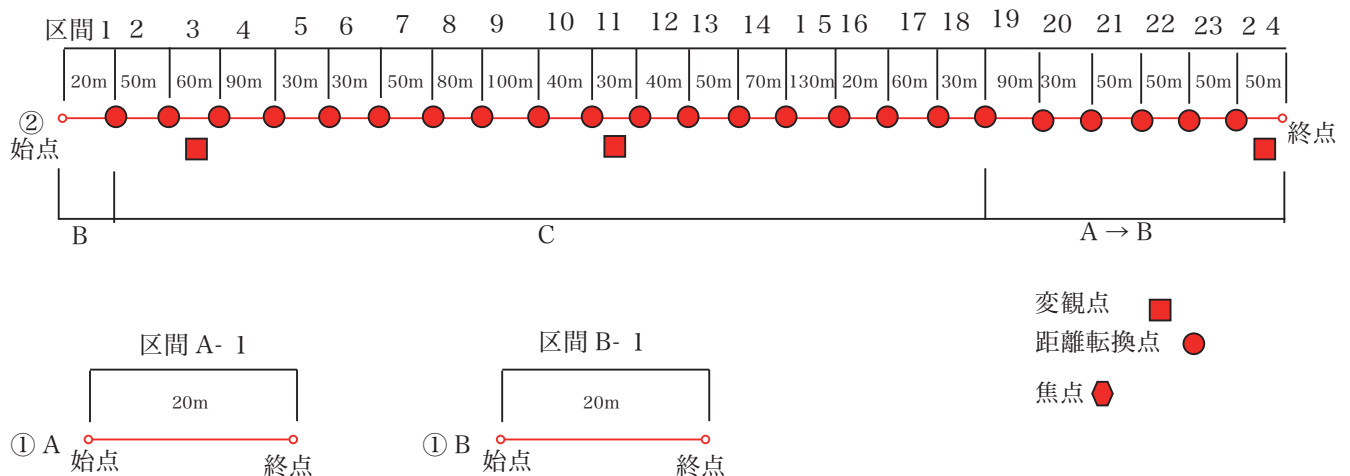


図2.17 九鬼略図

2.3 まとめ

以上、可視距離の測定と比較を説明した。可視距離の測定、比較を通して、非常に狭い路地の集落でも体感する距離より測定距離が長いことがわかる。また、九鬼や阿曾浦、古和浦の様に焦点となる地点に公共性の高い建物を配置する傾向がある。どの集落でも区間が30～50mの区間が多く、この区間の間に長い区間（100m超）があるパターンが多数あった。

また、路地の始点と終点は可視距離が短くなることが多く、集落の中心部ではかなり見通しのきく可視距離となっていることが観察された。

一見、単調に見える路地でも可視距離の変化を見ていくと、見通しの良さや見通しの悪さ、焦点となる建物で特徴ある建物の出現などリズムある変化がなされていることがわかる。この変化が路地の特徴となっている。

3 章 可視範囲の分析

3. 1 路地の幅員

3. 2 窓と庇

3. 3 塀

3. 4 空

3. 5 基壇

3. 6 まとめ

3 章 可視範囲の分析

漁業集落の路地の特徴は可視距離の変化だけでなく、その路地を取り囲む建物や空、建物以外の要素にもある。そのため、この章では2章で取り上げた可視距離の展開を補強する可視範囲の要素を取り上げる。路地内で最も目につきやすい要素である、窓／塀／空／基礎に、主に注目して分析を行う。また、各要素への影響が大きい路地の幅員も観察する。

各グループ又は区間ごとに1～3枚の写真を選定する。空き地や焦点に特徴ある建物を配置するなどの特徴は軸に最も現れていたことから、対象は軸における要素とする。

3.1 路地の幅員

路地の幅員は意外に変化が激しく島勝浦は最大と最小の差が激しい。路地の幅員は可視範囲内の要素の見え方に影響し、その場所の印象を変えていく。また、2章、3.2、3.3からも路地の幅員がその要素の形態や配置と可視距離に影響を与えていることがわかる。そのため、ここでは路地の幅員の変化を観察する。

まず、路地の幅員の最大と最小だが、答志（図3.1）は路地幅が始点で2,400mm、区間1の終わりで1,900mm、区間2の終わりが2,000mm、終点が2,500mmとなり幅が約1,900mm～2,500mmで路地の出入り口の幅員が広い。同様に路地幅を見ると阿曾浦（図3.2）で1,500mm～3,800mm、古和浦（図3.3）で3,000mm～4,000mm、島勝浦（図3.4）で1,500mm～4,600mm、九鬼（図3.5）で1,800mm～2,400mmである。九鬼と答志はほぼ同様の幅員にあると言える。また、阿曾浦も部分的には答志と幅員が近いと言える。一方、古和浦や島勝浦は最大の幅員が他の漁業集落に比べ広いため、塀や窓等の各要素の形態、在り方がかなり異なっている。

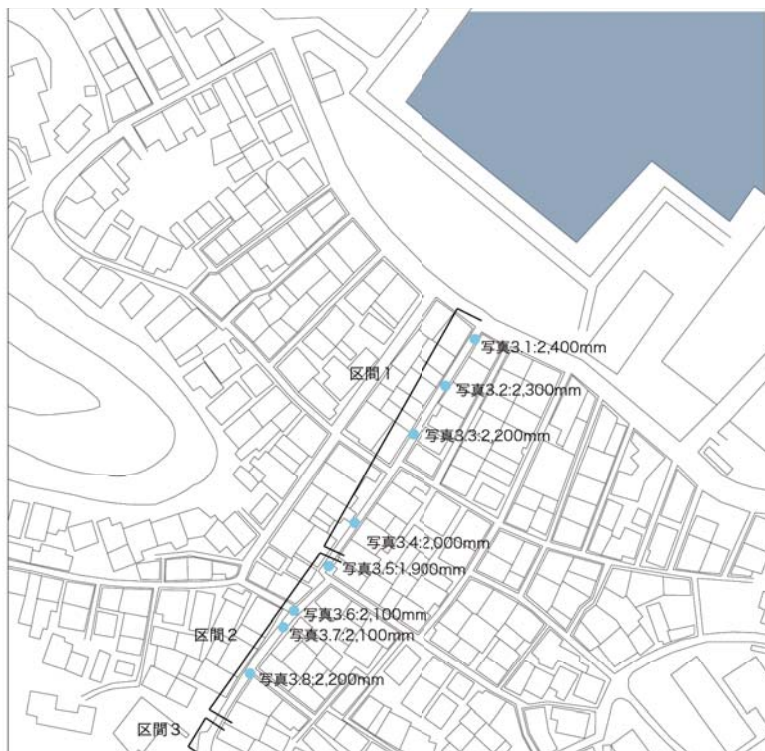


図3.1 答志



図 3.2 阿曾浦



図 3.3 古和浦



図 3.4 島勝浦



図 3.5 九鬼

答志は幅員の変化が区間 1 の中盤まで広く、区間 1 中央～区間 2 中央にかけて、やや狭くなり、区間 3 に向けて再び広がっている。路地が複雑に湾曲していても幅員の変化があるといえる。

阿曾浦でも同様の事が確認された。区間 1 は広く区間 2、3 は半分以下の幅員になっている。また区間 4～7 は海岸線のため除くとして、区間 8～11 まで、つまり路地入り口から海岸線の通りとの交点までは幅員が広がっている。しかし、交点を超えて区間 12、13、14、15 は再び狭くなり半分以下の幅員となっている。やはり、路地の入り口は幅員が広いことが確認された。

古和浦は、郵便局前（区間 5）以外は 3,000mm 程度でほぼ変化なしである。また曲がり角も少なく見通しがかなり良い路地となっている。幅員が広いことから駐車場も多くあり、家に塀が設置されていることが多い。

島勝浦でも、古和浦と同様、ほぼ安定して幅員が広い若干の変化があるとしたら、区間 2、3 が全体からみて幅員が狭い地点といえる。また、路地端部である終点で突然幅員が狭くなっている。

九鬼では区間 1～7 と区間 16～24 が幅員が広くその間の区間 8～15 の幅員が狭くなっている。この区間では幅員が 2,000mm を下回っており、かなり狭いといえる。答志と同様に、幅員が広い→狭い→広いで変化していくことが確認された。

以上のように幅員が路地の入り口付近で広く、中盤で狭くなり再び広がる傾向にあることがわかる。

このことを元に 3.2 以降の分析を行う。

3.2 窓と庇

建物が密集して建てられているため住宅の窓は常に目につく要素であり、窓は路地の中で採光を得るための重要な要素である。写真で窓の部分にのみ色を付けていく。(答志：写真3.1～3.8、阿曾浦：写真3.9～3.19、古和浦：写真3.20～3.31、島勝浦：写真3.32～3.51、九鬼：写真3.52～3.76／路地始点から終点まで)

幅員が2,000mm以下の部分を観察すると、1階の窓は腰窓で小庇がついている。(写真3.7、16、17、19、45) 幅員が2,500mm程度になると家屋の形が棲入りや玄関を作るので窓一つ一つにつけず全体に庇をつける傾向になる。(写真3.9、21、38、44) また、特徴として答志では1階の腰窓に手すりがついている。木製、金属など種類は色々だが設置されている傾向が強い。

幅員が2,000mmを超えたあたりから掃出し窓が設置される傾向がある。特に九鬼によく見られる。(写真3.54、61) 九鬼では幅員2,000mm以下の地点でも掃出し窓が見られる。この場合、敷地境界から庇の長さ程度、訳400～600mm下がって建てられている。又は、路地に対して垂直に建てず少し角度をつけ建てる事で敷地境界と距離を取ることで掃き出し窓を設置している。このため九鬼では全体的に掃き出し窓が多い傾向にある。(表3.1)

表3.1 窓と幅員の関係

集落／幅員	1,500mm ≤ L ≤ 2,000mm	2,000mm < L ≤ 2,500mm	2,500mm < L
答志	腰窓／1階に手すり／個別に庇がつく	腰窓／1階に手すり／個別に庇がつく／小窓が多い	なし
阿曾浦	腰窓／個別に庇がつく／小窓が多い	掃出し窓／全体に庇を掛ける	掃出し窓／全体に庇を掛ける
古和浦	—	—	掃出し窓／全体に庇を掛ける
島勝浦	腰窓／個別に庇がつく／小窓が多い	なし	掃出し窓／全体に庇を掛ける
九鬼	腰窓と掃出し窓／全体に庇を掛ける	掃出し窓／全体に庇を掛ける	掃出し窓／全体に庇を掛ける
	↑九鬼での吐出し窓を設ける場合、敷地境界から600mmほど庇の突出分下がって建てられている (路地の幅員の最低は約1,500mmのため1,500mmからとなっている)		

古和浦のように幅員が広すぎる場合は当てはまらないが、設置される窓とその庇は幅員が狭いほど腰窓で個別の庇がつき、幅員が広くなると掃き出し窓が増え、腰窓でも掃き出し窓でも庇は全体につけられる傾向がある。

このため、幅員の狭い路地ほど頭上に庇が複数、重なりあり全体的に囲まれた印象を歩行者に与えている。



答志 写真 3.1:2,400mm



写真 3.2:2,300mm



写真 3.3:2,200mm



写真 3.4:2,000mm



写真 3.5:1,900mm



写真 3.6:2,100mm



写真 3. 7:2,100mm



写真 3. 8:2,200mm



阿曾浦 写真 3. 9:4,000mm



写真 3.10:1,600mm



写真 3.11:1,500mm



写真 3.12:3,200mm



写真 3.13:3,200mm



写真 3.14:3,200mm



写真 3.15:2,900mm



写真 3.16:2,900mm



写真 3.17:2,000mm



写真 3.18:1,700mm



写真 3.19:1,700mm



古和浦 写真 3.20:3,000mm



写真 3.21:3,200mm



写真 3.22:3,200mm



写真 23:3,300mm



写真 24:3,300mm



写真 3.25:4,200mm



写真 3.26



写真 3.27:3,300mm



写真 3.28:3,300mm



写真 3.29:3,200mm



写真 3.30:3,200mm



写真 3.31:3,000mm



島勝浦 写真 3.32:3,300mm



写真 3.33:3,500mm



写真 3.34:3,500mm



写真 3.35:3,000mm



写真 3.36:3,000mm



写真 3.37:2,900mm



写真 3.38:3,900mm



写真 3.39



写真 3.40:3,400mm



写真 3.41:3,300mm



写真 3.42:3,600mm



写真 3.43:3,800mm



写真 3.44:4,300mm



写真 3.45:1,500mm



写真 3.46:1,500mm



写真 3.47:1,500mm



写真 3.48:1,600mm



写真 3.49:1,600mm



写真 3.50:1,500mm



写真 3.51:1,500mm



九鬼 写真 3.53:2,000mm



写真 3.54:2,000mm



写真 3.55:1,800mm



写真 3.56:2,000mm



写真 3.57:2,000mm



写真 3.58:2,200mm



写真 3.59:2,100mm



写真 3.60:2,100mm



写真 3.61:1,700mm



写真 3.62:1,700mm



写真 3.63:1,700mm



写真 3.64:1,800mm



写真 3.65:1,800mm



写真 3.66:1,600mm



写真 3.67:1,500mm



写真 3.68:1,800mm



写真 3.69:1,600mm



写真 3.70:2,100mm



写真 3.71:2,000mm



写真 3.72:2,100mm



写真 3.73:2,100mm



写真 3.74:2,100mm



写真 3.75:2,100mm



写真 3.76:1,800mm



写真 3.77:1,800mm



写真 3.78:4,000mm

3.3 塀

庇は路地の印象を大きく左右する。写真3.11と写真3.65を比較すると同じ幅員でも全く違う印象になる。このように塀は一般的な住宅では通常設置されているものだが幅員の狭い路地ではその特徴が顕著に現れる。窓同様、塀は建物から突出し設置される要素のため路地内で目につきやす。

答志では敷地境界限界に建物を建てる傾向が強いので塀はほとんど見られない。一方、幅員の変化が似た傾向にある九鬼では塀はどのような幅員でも確認された。路地の幅が狭い場合でも1m以上の高さの塀が設置される建物が多いといえる。基礎が高いため塀と擁壁が一体になり1mになっているものも多数確認された。同様に古和浦でも路地が狭くとも塀を設ける傾向にある。ここでは、塀は腰高かそれ以下の低く見通しがよく、建物が見えないように遮る用途ではないと考えられる。そのため、腰掛けて老人が話している風景等が目撃された。



写真3.11



写真3.65

表3.2 塀と幅員の関係

集落／幅員	1,500mm ≤ L ≤ 2,000mm	2,000mm < L ≤ 2,500mm	2,500mm < L
答志	なし	1、2軒あるがほとんどの建物にない	確認できず
阿曾浦	軸北側にあり：高さ1～1.5mほど（軸南側ではない）	あり：1～1.5mほど	あり：1～1.5mほど（ブロック、モルタル）
古和浦	－	－	あり：0.8～1.5mほど（ブロック、木）
島勝浦	あり：～1mほど（ブロック、石）	あり：1～1.5mほど	あり：0.5～1.5mほど（タイル、石、ブロック）
九鬼	あり：1～1.5mほど（ブロック、モルタル）	あり：1～1.5mほど（ブロック、モルタル）	あり：1～1.5mほど（ブロック、モルタル）

ここで、塀が集落内でどの地点に多く設置されているかを見る。塀に限らず生け垣やフェンスで敷地を囲い建物が前面に建てられていない地点を塗りつぶした。

（図3.6～3.10）



図 3. 6 答志



図 3. 7 阿曾浦



図 3. 8 古和浦

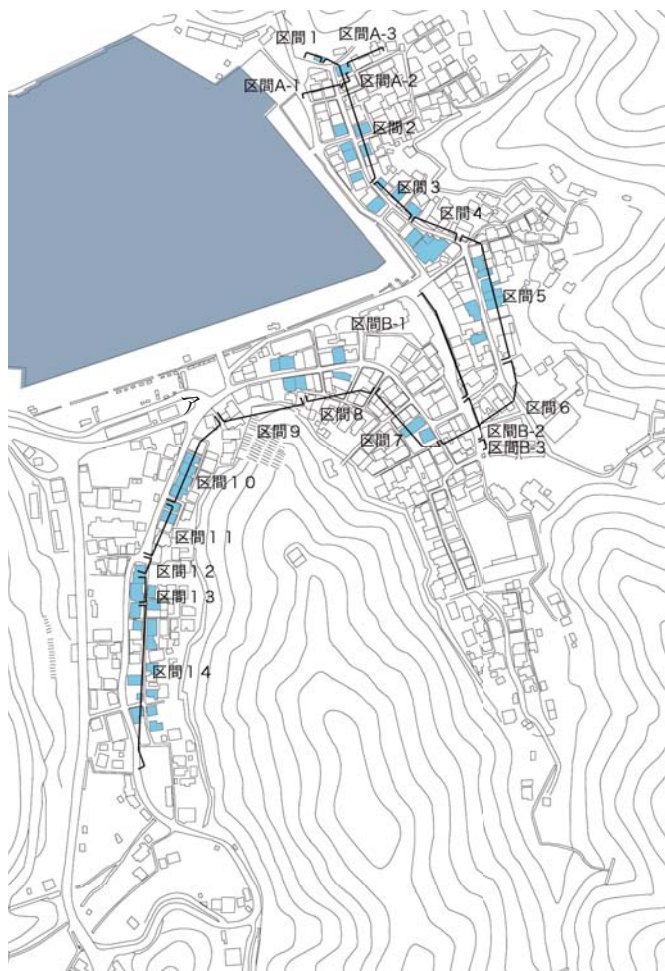


図 3. 9 島勝浦



図 3. 10 九鬼

・答志（図3.6）は全体的に塀が設置される余地がないため確認されたのは2カ所だが、海岸線である軸の始点には設置されない傾向にある。集落内で、この軸の路地に限らず他の路地でも同様の傾向が観察される。建物の軒も敷地境界線から完全にはみ出して建てられているので塀を設置するのは集落の端部で敷地に余裕がある場所に限られる。そのため、軸に直交する路地の始点・終点（集落西側）では1.5mほどのブロック塀を設置する建物がある。

・阿曾浦（図3.7）では路地幅によらず塀が設置されている結果であるが、地図上で分布を確認すると、集落北側に集中し、残りは路地同士が交わる地点と路地の入り口にあることがわかる。集落北側は上り坂で擁壁の意味もあるため路地が1.5mと狭くとも塀を設置する傾向にあるといえる。集落南側では路地と路地の交点の開け具合に影響されていると考えられる。軸に直交する路地も2mほどで、見通しが良いため路地同士の交点に建つ建物は焦点となり常に見られる。そのため、塀を設置する建物が多いと考えられる。

・古和浦（図3.8）では軸が船体的に幅員が広く見通しが良い傾向にある。また、建物が大きく敷地に余裕があるためセットバックして建てられている。このため塀が全体的に分布しており、生け垣や板塀も確認された。川を超えて北側は、家が点在しているため、逆に塀を設ける家が少ないといえる。旅館や店舗の裏側等住宅でない建物も混ざっているため塀を持つ建物が分散されている。また、他の集落と違い全体的にかなり見通しが良いのも塀を建てることに影響していると考えられる。

・島勝浦（図3.9）では集落の端部に塀が設置されている傾向が強いとわかる。どちらも、住宅が多く幅員に関係なく塀が設置されている。集落北側は比較的低い塀や、部分的に塀を設けている建物が多い。集落南側では上り坂のため、基礎の高さが加わって塀は1mほどで、全体的に囲まれている傾向が強い。集落の中心部、神社や寺がある周辺から図3.9のアまでは店舗や旅館、水産加工会社などがあるため住宅がそもそも少ないが、塀を設ける傾向は少ないといえる。

・九鬼（図3.10）では路地幅によらず塀が設置されている傾向にある。また、軸に面する住宅が全体的に塀を持つ傾向にある（擁壁含む）。軸の終点である集落北側の端部では山側が擁壁となり対面に建物がないため、塀を設置する建物が少ないと考えられる。また、軸の南側と北側を比べると軸の北側に塀が設置されている傾向が強いことがわかる。

以上のように、路地の端部である始点と終点では塀が設けられる傾向がある。また、路地同士の交点や焦点となる建物は塀を設ける傾向にある。さらに、集落の立地条件から、路地が東西に伸びる場合、日光が当たりやすいため路地北側の建物は遮光と目隠しのために塀を設けているのではないかと考えられる。

集落により塀の高さが異なり、それにより路地の印象が大きく異なる。また、塀は路地との境界に設置されるため、路地を縁取り印象を強調する要素となっていることも伺える。

3.4 空

路地内で上下方向の空間の広がりや歩行者の囲まれる間隔を左右する。空の見える範囲は路地の幅員により大きく異なるため、ここでは路地の幅員に近い答志と九鬼を対象に写真内での空の面積の割合を観察した。

写真は路地内の複数の地点で、焦点の高さ 1,500mm 前後で路地中央に立ち撮影した。その後、写真が視界の範囲と仮定し、写真の面積に対する空の部分の割合を算定した。(答志：写真 3.79～写真 3.84, 図 3.11 / 九鬼：写真 3.85～写真 3.111, 図 3.12)



図 3.11 答志



図 3.12 九鬼

答志は全体的に10%を下回っており、空は建物と建物の中央に少し見えるだけである。また、区間1の終わりでは焦点となる建物が正面に現れ、より空が見えない結果となっている。(写真3.81) 平均すると6.1%である。漁業集落以外で例として挙げるが、関(三重県亀山市関宿:幅員6mほどで2層の建物)では約25~30%の空の支配率の地点が多かった。この点からも全体的に空は見え閉じている事となる。

一方、九鬼では始点から路地中央までが3~20%の間で、中央から終点までは20%を超えることが多く比較的開けている。平均すると16.7%で答志に比べ空が見え上方に開けている。場所によっては関の通り並みに空が見えていることとなる。

二つの集落は路地の幅員が比較的近いが空の支配率に大きな差がある。これは、建物の高さと塀に影響されているといえる。答志は3階建てや2階建てでも全体的に高く、だいたい5.5~6.5mぐらいで、敷地限界に建物が建つ傾向にある。

一方、九鬼では建物の高さは少し低い部分もあるが全体としてはあまり答志と変わらない。しかし、建物の前に塀を設け下がっているため、建物が敷地限界に建つことがまばらである。そのため、路地の幅員より実際に見える幅員は広く感じ空も支配率が上がっているといえる。

九鬼の写真3.96や写真3.98と答志の写真3.82の様に可視距離が短くとも、空が開けていたり、空き地等の変観点により写真3.79の様な囲まれ感は減少していると考えられる。

以上のように、路地内で空は明るく、路地の先きを示す要素であり、見える割合により可視距離の短さをカバーし上下の広がりを生み出している。



答志 写真 3.79:6.6%



写真 3.80:8.2%



写真 3.81:3.2%



写真 3.82:7.5%



写真 3.83:6.2%



写真 3.84:4.8%



九鬼 写真 3.85:3.5%



写真 3.86:12.5%



写真 3.87:16.9%



写真 3.88:20.7%



写真 3.89:19.8%



写真 3.90:11.9%



写真 3.91:15.6%



写真 3.92:20.4%



写真 3.93:11.0%



写真 3.94:14.9%



写真 3.95:14.6%



写真 3.96:13.4%



写真 3.97:16.0%



写真 3.98:22.0%



写真 3.99:5.6%



写真 3.100:3.2%



写真 3.101:10.8%



写真 3.102:19.8%



写真 3.103:8.2%



写真 3.104:27.8%



写真 3.105:21.8%



写真 3.106:24.7%



写真 3.107:22.7%



写真 3.108:26.0%



写真 3.109:15.8%



写真 3.110:17.4%



写真 3.111:35.0%

3.5 基壇

建物が地面と接する基壇は路地との分かれ目である。漁業集落の路地では建物の外構の様に仕上げで敷地と通りの境目を示す事はできない。そのため、塀を建てにくい傾向にある漁業集落では、基壇が敷地と路地の重要な境目となるため注目した。ここでは、比較的幅員が近く集落規模の近い答志、阿曾浦を取り上げる。(答志：写真3.112～写真3.119, 図3.13／阿曾浦：写真3.120～写真3.129, 図3.14)

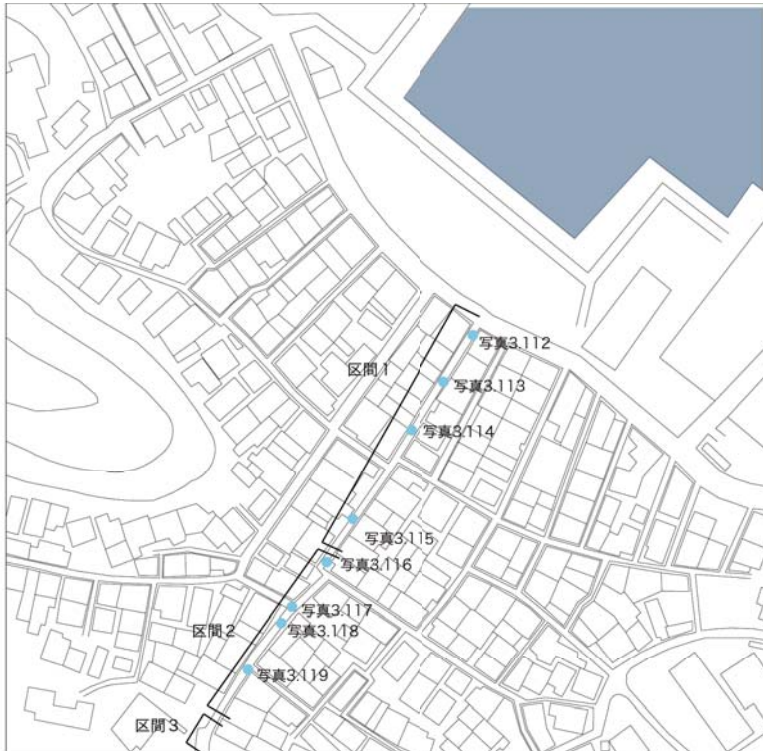


図3.13 答志



図3.14 阿曾浦

高密度な集落であるため建物が敷地境界から少し下がっている場合でも基壇の部分が敷地境界から始まることが多く観察された。(写真 3.119,3.126,3.127,3.128)

答志では基壇が植木鉢などの路地に置かれたものや店舗で途切れることはあるが、ほぼ全体的に連続している。塀等にも基礎の上端の線により連続がなされている。

一方、阿曾浦の区間 1～3 でも同様のことが確認できた。しかし、阿曾浦の区間 8～10 中央までは基壇となる部分が少ないことが観察された。特に、区間 10 の中央では写真 3.125 のように店舗の開口が大きく地面まで開いている。区間 10 の写真 3.125 と区間 14 の写真 3.128 や答志の区間 1、2 の写真 3.112,3.118 を比べると写真 3.125 で基壇が不連続又は、無いことがよくわかる。この区間に続く区間 10 中央～区間 14 までは再び基壇が連続してく。

答志も阿曾浦も路地が細く建物全体が見渡せない状況が多く、可視範囲でよく見えるのは主に 1 階部分である。そのため、基壇は高密度に建物が建ち、対立する建物の形態の場合、全体の連続を示す大切な要素となっていることが観察された。また、塀のように完全に敷地と路地を遮断する要素でなくとも、地面からの少しの高さの差で十分に路地と敷地を区分することができ境界の役目を果たしていたといえる。

この連続は、3.3 から幅員が広い場所では塀の基礎上端の継ぎ目までが、幅員が狭い場所では基礎や敷地限界につけられた段差によって確保されているといえる。



答志 写真 3.112



写真 3.113



写真 3.114



写真 3.115



写真 3.116



写真 3.117



写真 3.118



写真 3.119



阿曾浦 写真 3.120



写真 3.121



写真 3.122



写真 3.123



写真 3.124



写真 3.125



写真 3.126



写真 3.127



写真 3.128



写真 3.129

3.6 まとめ

以上の3.1～3.5をまとめると以下のようになる。(図3.15～3.19)



図3.15 答志



図3.16 阿曾浦



図 3.17 古和浦

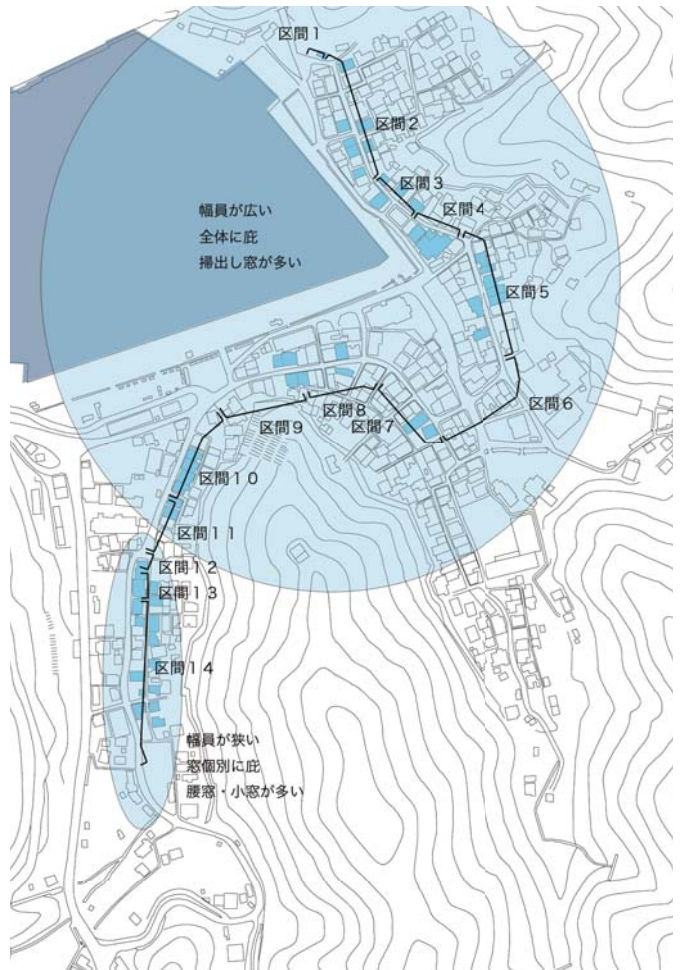


図 3.18 島勝浦



図 3.19 九鬼

路地の幅員は端部で広く中央で狭くなる傾向にあった。

また、幅員が広い場合は掃出し窓と塀が多くなる傾向にある。さらに、庇は全体にかけられ、建物の前に塀との隙間ができ植木や自転車等が置かれている。

逆に、幅員が狭くなると、腰窓が増え、庇が窓個々につけられている。また、小窓も多くなり、塀が泣くなる傾向にある。これは、開放度を窓の大きさと塀の有無で調整しているといえる。

要素個別に見ていくと、塀は方位と路地の交点に影響されているものがあり、それ以外は路地端部に多く観察された。

空の支配率は緩やかな曲がり角では変化は無いが、急な曲がり角や変観点で空き地等に出くわした場合、路地が狭い場合に低くなっている。

また、路地の幅員にや塀の有無に影響されないが、基壇の連続は建物同士が非常に対立する形態の場合、路地を縁取り全体をまとめる役割を果たしていることが観察された。

4 章 結論

4. 1 結論

4. 2 今後の展望

4 章 結論

4.1 結論

本研究では可視範囲の制限と変化から漁業集落の路地における領域感の把握とその要素の遷移を観察してきた。

可視距離の制限は路地の曲線だけでなく、不規則な地割りによる突出や、他の優先される路地による分断が原因であることがわかった。また、路地の可視距離の変化は30～50mの区間距離で変化の波があり、路地の始点と終点で可視距離が短くなり見えにくい防御がなされていることがわかった。この変化の中で、焦点となる地点に公共性の強い施設や店舗を配置し目につきやすくしている傾向があることも観察された。また、焦点にならずとも、空き地や路地の交点の広場的要素をもつ地点などが分散し集落にあることで密集度が落ちることなく採光や可視範囲の変化を生み出していた。

また、可視範囲内では建物の要素の変化により路地の終点や始点、中間点の位置感覚が補強されている。全体を通して路地の端点は幅員が広く区間が短く視界が小刻みに変化している、また幅員が広い(2,000mm以上程度)事から塀があり、窓の底は全体にかけられている傾向にある。中央では幅員が狭い(2,000mm以下程度)が可視距離は長く、窓の底は個別に掛かり塀は少なくなる。室の開放度を窓の面積と塀の有無によって操作している事がわかった。このような路地の中での変化がみられ、始まりから終わりまでの一連の流れが、様々な形態や色彩の建物が並び、密集して建てられている中に、路地を歩いて始まりと終わりを感じさせる形態的、空間的特徴を作り出していることが示された。

漁業集落の場合、この路地の特徴、特に路地端部に見られる特徴は集落の結束性を高め防御の意味があると解釈できる。

しかし、このように路地の一連の展開を理解することは漁業集落の路地の特徴を知ることに関わり、集落の残すべき特徴として、今後、漁業集落が法的に整備されていく段階で利用可能である問い考えられる。また、この空間的特徴は通りの閉鎖性と開放性を操作する上で要素や幅員によって生み出せることを示唆している。さらに、このような路地の一連の始まりから終わりまでの展開を知ることは住宅地や市街地での通りの展開に応用する事が可能であると考えられる。

4.2 今後の展望

本研究は路地の特徴を示し、4.1でも示した通り、住宅地の通りや漁業集落の再生・復興で適応可能であると考えている。そのため、展望として本研究の適用可能性を以下に示す。

・可視距離の変化

ある地点に置ける路地の拡張をする際に適用可能。(図4.1)



図4.1 例

黒丸で囲まれた路地は途中、曲がっている。この路地を拡張しようとする際、可視距離から示された領域感を維持するためには、路地の中央から均等に拡張するのではなく図4.1で示すように曲がり角の手前と後で路地の片側を拡張することで領域感を維持できると考えられる。このような、路地拡張の場面で適用可能である。

・建物要素の展開

路地の全体的な雰囲気と流れは建物の要素が大きく関わっている。

路地の雰囲気を維持するためには建物要素を個別に保存できなくとも、全体的な展開を持てば良い。例えば、路地を拡張した結果、幅員の変化が無くなってしまう場合、路地の変化を維持するためには建物要素の変化が必要になる。このとき、路地端部から端部までの間に窓や塀の形態の変化の指針を盛り込む事で本来特徴である視覚的展開を維持する事ができ、路地の端部を示す事は集落の範囲（ふち）を示す事にも繋がる。また、集落の再生など復興を行う場合、建物要素を地点ごとに形態を定め、路地の景観は元の状態からは変わるが、視覚的展開や流れは維持されることが考えられる。この形態を定める基礎として本研究のような現状の視覚的展開の特徴を観察する事が利用可能である。このように、建物の立て替えや路地拡張、再生の場面で適用可能である。

その他、幅員や可視距離、建物要素の変化を操作することは、単調さを防ぎ、通りの終わりや縁を示すと良い場面で適用可能であると考えられる。例えば、新たな住宅地の通りをつくる場面や、建物のアプローチをつくる場面である。

付録

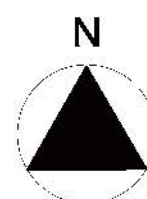
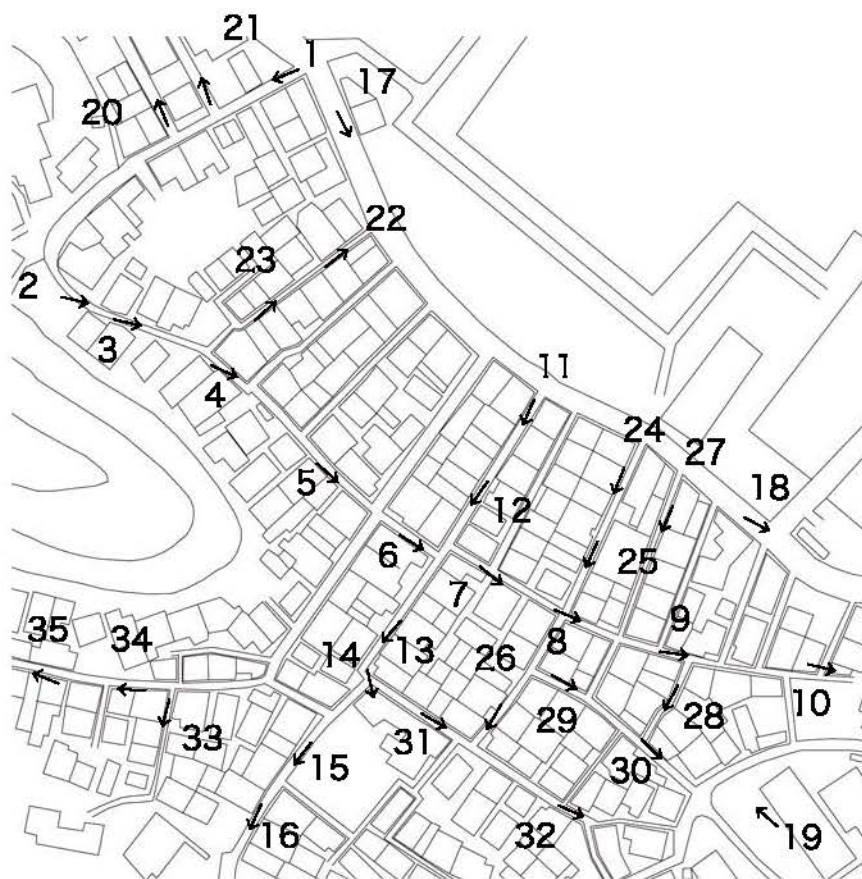
答志

阿曾浦

古和浦

島勝浦

九鬼



答志



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32

付 集落与真 04
答志



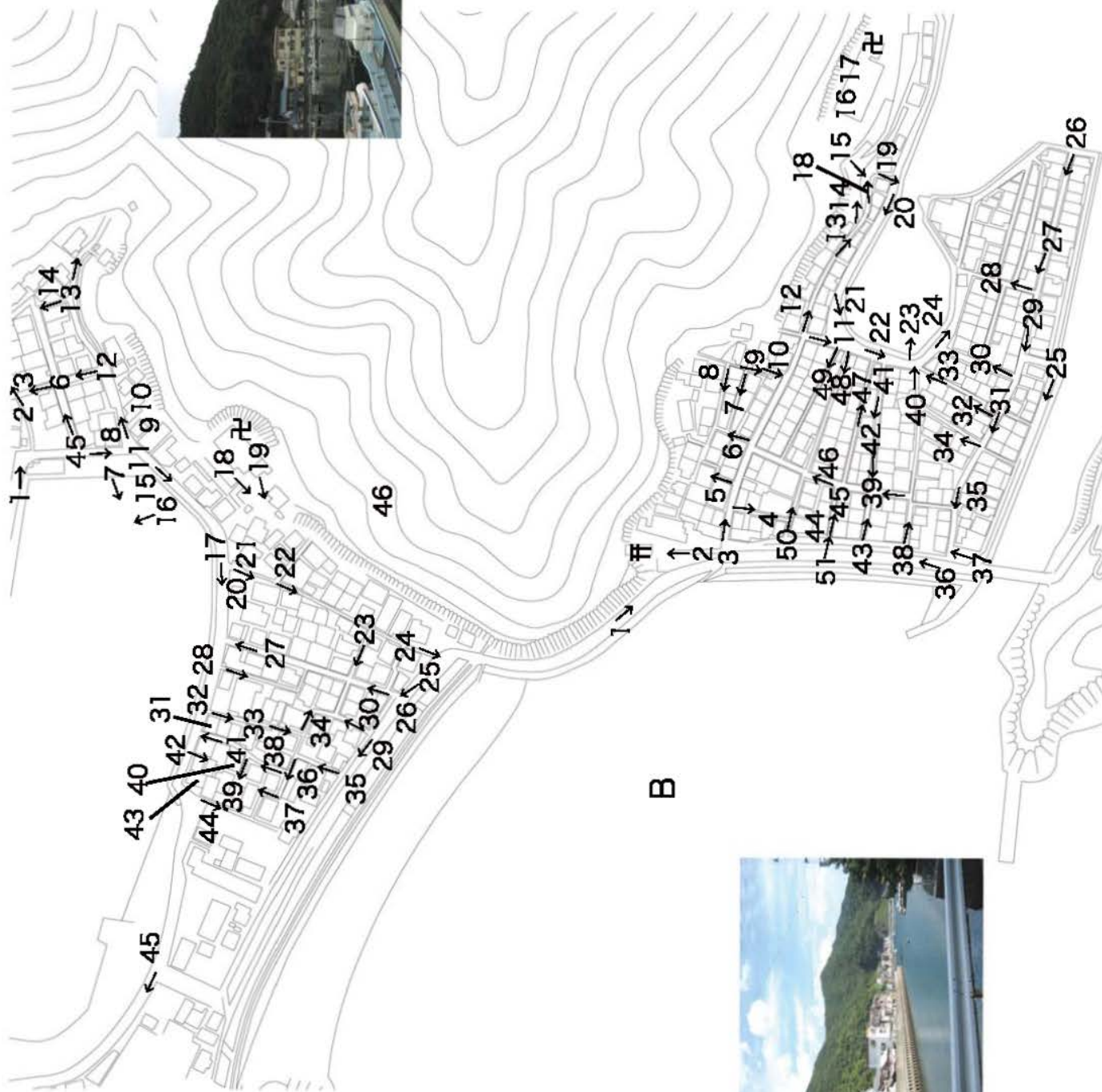
33



34



35



A

B



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16

付 集落写真 02
阿曾浦 A



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



1



2



3



4



5



6



7



8

付 集落写真 01

阿曾浦 B



9



10



11



12



13



14



15



16

付 集落写真 02

阿曾浦 B



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



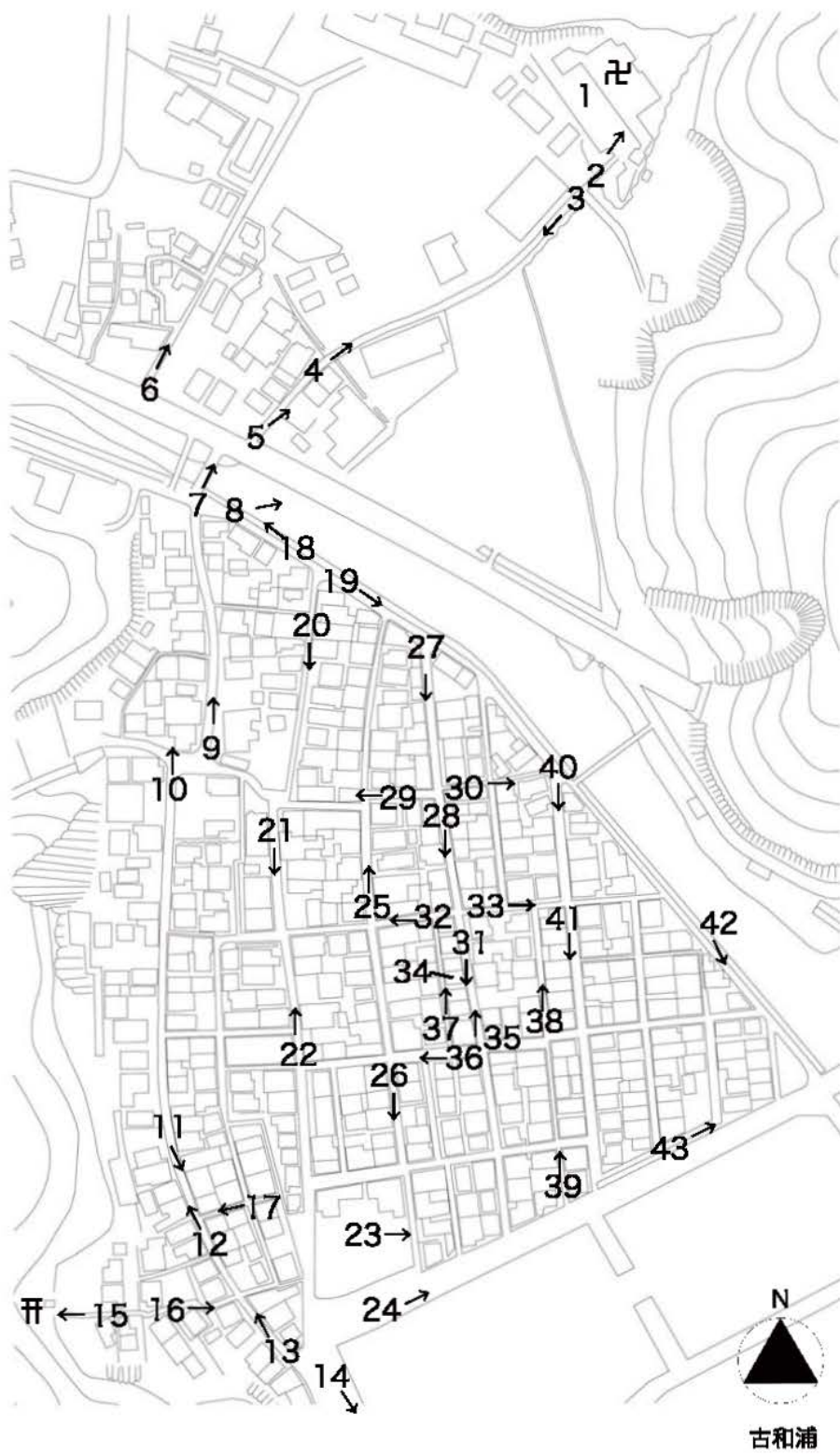
49



50



51





1



1



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14

付 集落写真 02
古和浦



15



16



17



18



19



20



21



22

付 集落写真 03
古和浦



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43





1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16

付 集落写真 02
島勝浦



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48

付 集落写真 06
島勝浦



九魂



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48

参考文献

参考文献

- ・ Gordon Cullen: 都市の景観 鹿島出版会 1975 原著 1971
- ・ 福岡市玄界島復興担当部：福岡県西方沖地震による玄界島の被害状況について 20070630
- ・ 池田碩：よみがえった災害地-玄界島- 奈良大学紀要 37号 pp55-64 2008

著者論文

- ・ 野並和紗：平成20年度卒業論文 三重県の漁業集落にみる空間図式の地形への適応 集落の配置および定位分析を通じて（野並和紗，富岡義人：空間図式の地形への適応に関する考察-三重県の漁業集落の配置および建物の定位分析を通じて-，2009年日本建築学会大会（東北）学術講演梗概集 6109，pp. 617-618）